

魔法少女まどか☆マギ  
カ～まだ誰も知らない  
物語～

サウザンド・J

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ここは、皆が知っている見滝原とは違う見滝原。魔法少女など存在しない平和な大都市である。

鹿目まどか、美樹さやか、暁美ほむらは見滝原中学の3年生、佐倉杏子は縦浜中学の3年生、バママミは高校1年生だ。

特に不自由もなく生きてきたまどかはある日、奇妙な夢を見た。

そして、魔法少女を名乗る謎の少女と出会い、見滝原はどんどんおかしくなっていく。

この先に、彼女達を待ち受ける運命とは!?

# 目次

- 第1章? 辺境の物語? —————
- 第1話 「ぜんぶわすれて」 ————— 1
- 第2話 「弱いのは貴女だけじゃない」 ————— 21
- 第3話 「お前たち、魔法少女にならないか?」 ————— 38
- 第4話 「これ以上のことはできないぞ」 ————— 58
- 第5話 「その言葉に、二言はないわね」 ————— 78
- 第6話 「とてもとても腹が立ちます」 ————— 94
- 第7話 「そこは、私の場所です」 ————— 106
- 第8話 「この世界は、わたしが救う……!」 ————— 128
- 第9話 「全ては陛下のためです」 ————— 141
- 第10話 「もう一度、魔法少女に……!」 ————— 157
- 第11話 「誰もが、魔法少女の勝利を信じてる」 ————— 175
- 第12話 「さようなら、恭介」 ————— 192
- 第13話 「わたしの、最高の仲間たち」 —————

第2章? 明日への物語?

---

213

第14話「こうして続いていくんで  
しょうね」

---

229

第15話「ハッピー、バレンタイン!」

---

249

第16話「わたしたち、高校生になつた  
んだね」

---

263

# 第1章？ 辺境の物語？

## 第1話 「ぜんぶわすれて」

わたし、鹿目まどか。普通の中学3年生。

もうすぐ夏が始まるから、受験勉強も本格的になったの。

わたし、昔から得意な学科とか、人に自慢できる才能とか、何もないけど、憧れのマミさんと同じ高校に通いたいから頑張ってるみるんだ。

今は勉強で大変だけど、わたし、とつても幸せなの。こんな時間がいつまでも続けばいいのになって。

くまだ誰も知らない物語く 第1話

### 「通学路」

ま 「行つてきまーす！」

いつも通り、父の鹿目知久が作る朝食を食べ登校した。彼女によると、父の朝食は世

界一なのだそうだ。

?? 「まどかさん、おはようございます。」

ま 「あつ、仁美ちゃんおっはよー!」

この少女は、まどかの親友の志筑仁美。今日もいつものように一緒に登校というわけだ。

ま 「勉強の方はどう?」

仁 「一応やってますわ。」

ま 「あー、それ充実してる人が言う台詞だー。」

仁 「ふふ。」

そんな毎日が宝物である実感は、この時は薄かった。

ま 「あ、あれつて。」

仁 「上条君と美樹さんですわね。」

この世界のまどかと仁美は、さやかと深い関係はない。故に、仁美はさやかのことをさやかさんではなく美樹さんと呼んでいる。

ま「羨ましいなあ。わたしも誰かと付き合ってみたいなあ。」

仁「そうも言ってもらえませんわ。私たちは受験勉強があるんですもの。」

ま「そうだけどさー。」

さ「恭介、勉強はどうなの？」

恭「うーん、ヴァイオリンでちよつと忙しいから。」

さ「だーめ！ヴァイオリンばかりしないでちゃんと勉強する！」

恭「僕のヴァイオリンを認めてくれる高校に行くから大丈夫だよ。」

さ「勉強もしないとだめよ。教養がないと恥ずかしいからね。」

恭「さやかは僕を苛めてるのかい？」

さ「はあ？あんたのためを思って言ってるんでしょ！」

恭「うう、ごめん。」

さ「全く、あたしが付き合ってたらどうなったのかしら。」

立場はまるで逆のようだ。

ま「…あれ？仁美ちゃん？」

仁「あ、なんでもないですわ。」

ま「…。」

まどかは思い出した。仁美もまた、上条 恭介に思いを寄せていたということ。そんなことを考えていると、まどかは誰かとぶつかつた。

ま「あ、ごめんなさい。」

??? 「また貴方ね。」

しかめっ面を浮かべるこの少女は暁美ほむら。まどかや仁美の同級生で同じクラスだが、まどかとはとても仲が悪い。

ほむ「私から半径1m以内に近づかないでくれるかしら。」



仁「そんな言い方はあんまりですわ。」

ま「いいんだよ仁美ちゃん。」

「暁美さん、次からそうするよ。」

ほむ「いい心がけね。そうしてちょうだい。」

ほむらの呼び方もほむらちゃんではない。

ま「でも暁美さん、わたし、いつも思うんだけど、なんで、辛そうなの？」

ほむ「何を言ってるの？」

ほむらがまどかに暴言を放つ時、無意識のうちに悲しそうな顔を浮かべていたのだ。

ほむ「ふん。」

ほむらは先に行ってしまった。

ま「行こっか。」

仁「そうですね。」

こうして学校生活が始まった。

・  
・  
・

「???

ま「…あれ？」

気がつくと、見滝原の街は大災害にあつたかのように壊滅していた。

ま「何これ。こんなの絶対おかしいよ。」

しかし、街が壊滅した理由は大災害などではないことがわかった。

何故なら、すぐそこにあるボロボロなビルの角から、全長が10mもある四足歩行の

恐ろしい怪物が現れたからだ。

まどかには、わけがわからなかった。全てが突然起きたから無理もない。距離はあるが、怪物がこちらに近づいてくる。

ま「や、やだよ…。来ないですよ。」

ビッ!!

その時、反対の角から光が飛び散った。

どうやらその光は攻撃を意味しているらしく、怪物はダメージを受けた。

まどかがそこへ目を向けると、一人の少女が弓を構えて怪物に近づいているではないか！

それだけではない。辺りを見回すと、マスケット銃を持った少女、剣を持った少女、槍を持った少女、盾を左腕に付けた少女、そして手にメリケンサックを付けた少女が怪物を囲んでいたのだ。

彼女らは、まどかが小さい頃絵本で読んだ魔法少女に似ている。

ま「あれって、もしかして…。」

驚くのも無理はない。弓を持った少女は、鏡で見た自分の姿に酷似していたからだ。

ま「わけわかんないよ…。え？」

盾の少女がこちらに目を向けた。なんと知っているかは聞き取れないが、口が動いている。

ま「ぜんぶわすれて？」

・  
・  
・

〔保健室〕

ま「…(´▽`)は？」

仁「気がつきましたか？」

ま「？ 仁美ちゃん？」

目を開けると、保健室のベッドで寝ていた。

さ「鹿目さんごめん！」

ま「へ？」

事情を聞いてみると、体育の授業で行ったバレーボールでさやかスパイクが顔面に直撃し、気を失っていたらしい。

ま「いいよ、わたし、運動苦手だし。」

さ「ほんとにごめん！」

まどかは特に気にしなかった。大した怪我ではなかったし、あの夢が気になって仕方なかったからだ。

•  
•  
•

〔教室〕

1日の授業が終わった。

ま「はあ、疲れたよ。」

仁「お疲れ様です。」

ま「一緒に帰ろうよ。」

仁「ごめんなさい、これから塾がありますの。」

ま「そうなんだ。じゃあね。」

まどかは一人で帰ることにした。

さ「鹿目さん。」

ま「ん？なに？」

さやかに声をかけられた。

さ「明日日直だから忘れないでね。」

ま「わかった。ありがとう。」

ここでのまどかとさやかの関係はこの程度のものだ。

さ「…。」

恭「どうしたんだ？」

さ「なんか妙なんだよね。鹿目さんと話していると懐かしいっていうか…。」

恭「気のせいじゃないかな。」

さ「それもそうね。」

•  
•  
•

〔帰路〕

ま「うーん気になるなあ。」

夕暮れが街を照らす中、夢のことですつとモヤモヤしていた。

ま「お母さんに聞いてみようかな。」

その時だった！

滴が水面に落ちたような音が響き、見える世界が一瞬歪んだ。

ま「え？なんで、空が明るいの？」

夕暮れだった筈が、昼の空になっていた。

変わったのは空だけではない。下校途中の他の生徒も一瞬にして姿を消したのだ。

ま「誰か！仁美ちゃん！」



返事は返ってこなかった。反応したのは、

ゴゴゴツ!!

ま「きゃっ!」

metal don

地中からコンクリートを破って現れた怪物であった。

ま「夢で出てきた怪物…! 本当だったの?」

怪物が舌舐めずりをして見下ろす。しかし、腰が抜けてしまつて逃げる事ができない!  
い!

ま「誰か、助けて…。」

食べられる、そう覚悟し目を瞑った。

が、食べられる感覚はなく、代わりに宙を舞う感覚があった。

ま「助かったの？」

??「危ないところだったぞ。」

目の前には、まどかを覗き込む黄緑色の髪をした少女がいた。

?「お前、なんで避難してないんだ？」

ま「避難？」

?「しかも鹿目まどかのコスプレまでしてるとは。」

まどかは、返答するのをやめた。

?「ちよつと待ってろ。あいつはあたしが倒す。」

ま「えっ、待ってよ、怖いよ。」

答えず、怪物の目の前へ跳んだ。

？「メタルドンか。連中の情報は正しかったようだな。」

この怪物の名前らしい。

？「こいつは鈍（のろ）いから楽勝だな。」

「覚悟しろ！」

大口を開けたメタルドンにゆっくりと歩み寄り、

？「オラアッ！」

メ「ギイイイッ！」

閉じようとした僅かな隙を突き、メリケンサックを付けた右の拳でアッパーをかました！

？「まだまだ！」

飛び上がった背中に乗れ、両の拳でラツシユした！

？「だだだだっ！」

メタルドンの血が飛び散る。それが仇となった。

？「いっ！」

血が目に入り、目を開けられなくなってしまった。

メ「ギイツ！」

？「ぐっ！」

黄緑の少女は振り落とされ、メタルドンはその上にのしかかった！

ま「あっ！」

？「くそっ！」

両手は潰されなないためにメタルドンを抑えているため、目も拭けない。

今気づいたのだが、メタルドンは全身が硬いためメリケンサックでは圧倒的に不利だった。

ま「どうしよう、このままじゃ、わたしを助けてくれたあの子が死んじゃう!…はっ  
!」

あの夢を思い出した。弓を持った少女は、この怪物の顎の横に矢を放っていたということ。

まどかは走り出し、黄緑の少女に力の限り叫んだ。

ま「顎の横を狙ってっ!」

? 「はあ?」

ま「早くっ!」

? 「わかった!オラっ!」

やるかが決まったおかげで、力も入りメタルドンを退けた。  
そして、ハンカチで目を拭いた。

ま「危ないっ！」

目を拭き終わった直後、メタルドンが口を開け黄緑の少女を丸呑みしようとした！

？「だからお前は鈍いって、言ってるんだろ！」

ドゴツ!!

ひらりと身を躲し、まどかの指示通り顎の横に右ストレートをかました！  
様子から察するに、かなりのダメージを与えたようだ。

？「よし、トドメだ！」

途端にメリケンサックが光った。黄緑の少女は高く飛び上がり、メタルドンの後頭部  
目掛けて急降下し、

? ; 「メリケン・ハンマー」

? 「はあああつ！」

右の拳がメタルドンを貫いた！

メ 「ギイイイ……」

メタルドンはパアツ！と、光となって消えた。

ま 「やったあ！」

? 「終わったな。」

光となって消えたメタルドンから、カプセルのようなものが現れた。

? 「よし、これを持って報告だな。」

「あんた、助かったぞ。」

ま「こっちこそ、助けてくれてありがとう。」

「あの、貴女は何者なの？」

武「あたしか？あたしは武呂マリア、魔法少女だ！」

第2話へ、続く!!



## 第2話 「弱いのは貴女だけじゃない」

「まだ誰も知らない物語」 第2話

「??」

ま「ま、魔法少女？」

武「なんでそんなに驚くんだ？」

マリアは変身を解いた。

ま「だって、魔法少女なんて、絵本に出てくるキャラクターで…。」

武「そんなリアリティ満載な内容が絵本になるわけないだろ。」

ま「リ、リアリティ？」

武「魔法少女みたいな血生臭い話は子供向けじゃないだろってこと。」

ま「と、とにかく、ありがとう！」

まどかにはそんな難しい言葉はわからない。  
なので、ただ手を差し伸べた。

武「何回も言わなくていいぞ。」

「そーいや、あんたの名前は？」

手を取ろうとしながら訊いた。

ま「わたし、鹿目まどか。まどかって呼んで！」

武「えっ……！鹿目まどか？」

握手した瞬間だった。

再び滴が水面に落ちたような音が響き、見える世界が一瞬歪んだ。

ま「あ……。」

武「なにい？」

夕暮れの見滝原に戻っており、人々の姿もあった。

ま「戻ったの？」

武「どうなってるんだ？見滝原にこれほど沢山の住民がいる筈…。」

人a「キヤーっ！」

通行人がマリアを見て悲鳴をあげた。

ま「あっ。」

武「なんだ？」

本人は気にしてなかったが、マリアは先程の戦闘で（主に返り血により）全身血塗れだったのだ。変身を解いても血は取れないらしい。

ま「マリアちゃん、こっち来て！」

武「何処へ行くんだ？」

ま「先輩のところ！」

その先輩は、バمامィ。見滝原中学を卒業した、まどかが尊敬する先輩だ。まどかかマリリアの手を引っ張り走り出した。

・  
・  
・

「مامィが住むマンション」

ま「مامィさん！いますか？」

巴「あら、鹿目さん。どうしたのかしら。」

ドアを開けると、息切れたまどかと血塗れの少女がいた。

巴「鹿目さん、隣の人は…。」

ま「その、シャワー借りていいですか？」

巴「え？いいけど。」

武「！もしかして巴マミ!？」

マリアはマミを見るなり、目を輝かせながら呼び捨てした。

巴「え？は？」

武「本物だ！すげえ！」

ま「マリアちゃん…。」

まどかはマミが機嫌を損ねたことを察した。当然だ。知らない人間が急にやってきて呼び捨てしてくるのだから。

巴「貴女、お名前は？」

武「あたしは武呂 マリア。あんたと同じ年且つ魔法少女だ！」

巴「魔法少女？」

マミには何のことだかさっぱりわからない。

武「あんたもかよ。ていうか、まどかや巴マミの方があたしにとっては小説の中の話だぞ。」

巴「どういうことかしら？」

武「あたしがいた見滝原には実在しない架空の人物だ。」

マリアがいた見滝原では、完全にキャラクター扱いらしい。

武「小説によればまどかは中学2年生、巴マミは中学3年生だ。」

ま「それじゃあわたしと同一年だね。」

巴「私は高校生なんだけど…。」

武「え…。」

ま「ほんとだよ。」

武「こ、これは失礼しました！お許してください！」

態度が豹変した。

巴「そこまで改まらなくても…。」

武「いえいえ！上下関係は大事ですから！」

相当叩き込まれているようだ。

武「本当に浴室を借りてもよろしいのでしょうか？」

巴「いいわよ、あまり気にしないで。」

今度は困ってしまった。

巴「鹿目さんも序でに入ってきたらどうかしら。埃まみれよ。」

ま「ありがとうございます。」

•  
•  
•

シャワーを浴び終わり、ちよつとしたお茶会を始めた。  
マリアはママの服を借りて着ている。

巴「それで、武呂さんはどうして血塗れになつていたの？」

武「いつも通り怪魔と闘い、返り血を浴びたからです。」

巴「怪魔？鹿目さん、ほんとかしら？」

ま「本当です。食べられそうになつたわたしを助けてくれたんです。」

巴「そう。武呂さんはどうして鹿目さんを助けたの？」

武「？ なんでって…。」

ママらしい質問だ。

武「人を怪魔から守ることが任務だからです。」

巴「なるほど、貴女がいた見滝原では怪魔というものは普通なのね。」

武「はい。」

ま「わたし、もうわけわかんなくて…。」

巴「無理もないわ。私もちよつと混乱してるもの。」



マリアにとっては、怪魔がないことの方が不思議だ。

巴「それともう一つ、魔法少女って何かしら？」

武「簡単に言えば、怪魔と闘う戦士みたいなものです。」

ま「え！まだ中学生なのに？」

武「意外と普通だぞ。」

ま「大変だなあ。」

武「話は戻りますが、2人は魔法少女じゃないんですね？」

巴「そうね。」

ま「ちよつと憧れるけどね。」

武「そうだ、忘れるところだった。」

マリアは畳んで置いた自分のズボンのポケットから、先程の怪魔から出てきたカプセルを取り出した。

ま「あ、それって。」

武「ああ、メタルドンから出てきたものだ。」

巴「メタルドンって？」

ま「マリアちゃんが倒した怪魔です。」

武「これをやつとかなないと大変なことになるんだ。」

マリアの左腕に付いているブレスレットが、黄緑色の光を放つ宝石のようなものになった。

ま「何これ？」

武「これはソウルジエム。魔法を使うために必要なもので、命の一部だと聞かされてるぞ。」

巴「命の一部ですって？」

ブレスレットがソウルジエムに変わったところは我慢できたが、この宝石が命の一部だと聞いてしまい驚きを隠せなかった。

巴「なんで一部なの？」

武「そこまでは上からは聞かされませんでした。ま、どうでもいいんですけど。」

ま「そんなことないよ、大事なことだよ。」

武「これを壊されたら終わりだって知ってるからいいだろ。」

巴「(余計大丈夫かしら?)」

武「今、あたしのソウルジェムの光は魔法を使ったことで弱まっています。」

「このまま光が弱り完全に消えると、あたしは死んで、代わりに怪物が生まれます。」

ま「ええー!」

巴「まあ。」

マリアは真顔だ。

武「これの裏にカプセルを装着して…、スイッチを押す。」

すると、マリアのソウルジェムの光が強くなった。

ま「光が…。」

武「これでほぼ元どおり。本当は許可なくやったら駄目なんだけど。」

ま「そんな…、命に関わることなのに許可が必要なの？」

武「変か？」

ま「そりゃ、変だよ。」

巴「(おかしいわ。怪魔が普通なら民間にも知れ渡っている組織が武呂さんに指示しているはず。)」

「(なのに、命を軽んじてる。武呂さん本人までもが重く考えていない。異常よ。)」

「武呂さん。」

武「なんですか？」

巴「今日は何処に泊まるか決めてるかしら？」

武「そういえば、決めてないです…。」

あまり先のことは考えられないらしい。

巴「よかったらここに泊まっていけない？もう少しお話もしたいし。」

武「本当ですか！ありがとうございます！」

ま「مامィさん、ほんとは寂しいだけじゃないですか。ウエヒヒヒ」

巴「ちよ、そういうこと言わないの！」

読者の皆様にはブラックジョークに聞こえたと思うが、このマミの両親は健在であり、高校進学のため現在は一人暮らしをしている。故に、まどかがマミをいじっただけである。

巴「ほら、もう時間も遅いから鹿目さんは帰った方がいいわ。」

ま「ええ。」

巴「受験勉強頑張らないと駄目じゃないの。」

ま「そうですけど…。」

武「じゅけん？」

巴「鹿目さんにとつての戦いのことよ。」

武「じゃあ頑張らなきゃな！」

ま「マリアちゃんまでー。」

流石マミ。

ま「仕方ないか。マミさん、お邪魔しました。」

巴「気をつけてね。」

まどかはそのまま真つ直ぐ帰った。

・  
・  
・

〔客室〕

夕食はママがご馳走してくれ、寝る準備を始めた頃であつた。

武「ママさんの部屋つてやっぱ広いですよね。」

巴「確かによく言われるわね。お父さんとお母さんには感謝しないと。」

客室もなかなかのものだ。

武「ベッドなんて高級品、どこで手に入れたんですか？」

巴「それも両親が買ってくれたの。でも普通のベッドよ？」

武「いいいえ、あたしはベッドで寝たことなんてないですよ。」

巴「そうなのね。じゃあ布団だったのかしら？」

武「布団でもあまり寝たことがないです。殆ど布一枚だったの。」

巴「それは酷いわね。一生ここにいってもいいわよ、なんて。ふふ。」

武「：マミさんって、本当に魔法少女じゃないんですか？」

巴「？ どうしたの？」

武「その、もし、魔法少女だったら、助けてほしいなど、思いました。」

言いにくそうにしている。

巴「そんな大層なものじゃないわよ、私なんて。」

武「まどかの前ではああ言いましたが、あたしはあの小説がただの物語だとは思えな  
いんです。」

「だって、同姓同名且つ容姿もかなり似ているなんてことありますか？ いいえありません！」

巴「そう言われても…。」

武「あたし、強くないんです。今回だつてまどかがいなくなったら、こうして生きていけないかもしれません。」

「だから、誰かと一緒に闘いたいです。独りぼっちは嫌なんです。明日はまどかにもっと強く聞きます。」

巴「…うっ！」

ママに頭痛が走った。へ独りぼっちへ誰かと一緒にへ、この言葉が何故か頭に引っかかる。

武「大丈夫ですか!？」

巴「え、ええ、大丈夫よ。ちよつと疲れてるみたい。」

武「その、すみません。」

巴「気にしないで。おやすみなさい。」

作り笑いを浮かべ、洗面所へ行こうとした。

巴「(何か、大きなことを訊き忘れてる気がする…、あっ!)」



「武呂さん！」

質問を思い出し、マリアの所へ戻ったが、既に眠っていた。よほど心地が良かったらしい。

巴「起こしたら可愛そうね。」

「武呂さんはどうやって、魔法少女になったのかしら…。」

少し心残りではあるが、気分は良かった。

巴「武呂さん、弱いのは貴女だけじゃないわよ。」

第3話へ、続く！

## 第3話「お前たち、魔法少女にならないか?」

### ●怪魔データ●

??鉄の怪魔 メタルドン

・その性質は革新。

・トカゲのような容姿をした四足歩行の怪魔。

・製鉄所に住み着いていた爬虫類が、閉鎖とともに職人の無念を取り込み誕生。

・とは言え、製鉄所は稼働しなくなったため、永い眠りにつく予定であったが、IT革命に興味を持ったらしく、結局永い眠りにつかず見滝原に出没。

・鉄鉱石や化石燃料、さらには電気をも捕食し、持ち前の超音波で精密機器を狂わすことができる。

・外殻が鉱物でできており、打ち破つても血液を噴射するため対処は難しいが、鉱物で覆われていない箇所はとても弱い。だが、その部分すら鉱物で固めようとしていたようだ。

・この怪魔を倒したければ、速攻でケリをつけることが重要となる。

くまだ誰も知らない物語く 第3話

「見滝原中学校グラウンド」

今日は土曜日。学校は休みだが、見滝原中のソフトボール部が縦浜中のソフトボール部と試合をするため、まどかはそれを見に来ていた。

ま「あれ？仁美ちゃん？」

仁「あら、まどかさん。」

ま「仁美ちゃんも見に来てたんだね。」

仁「まあ、そうですね。」

何やら別の目的がありそうだ。

仁「まどかさんこそ、ソフトボールに興味がありましたっけ？」

ま「何ていうか…、勉強に集中できなくて。」

仁「あら、勉強しないと駄目じゃないですか。」

ま「だって、勉強難しいもん。」

まどかのモチベーションは下がっていたようだ。  
そうこう言っている間に、試合が始まろうとしていた。

キャプテン「今日こそ、縦浜中に勝つわよ！」

チームメイト「おーっ！」

キ「さやか、今日もお願いね。」

さ「任せて！このトップバッターさやかちゃん、ガンガンかつ飛ばしちゃうからねー！」

見滝原中のトップバッターはさやかだ。キャプテンからも頼られている。

ま「美樹さんかっこいいなあ。」

仁「そうですね。」

仁美は観客席をキョロキョロと見ている。

杏子「さて、相手は見滝原中だ。試合したことないけどアタシなら負けねえさ。」

この少女は佐倉杏子。縦浜中ソフトボール部のキャプテンであり、名投手だ。

チームメイトa「でも、あの8番は名打者って聞いてますよ。」

杏「そうか？ チョロそうじゃん。瞬殺つしよ、あんな奴。」

さ「むっ。」

噂の8番に聞こえたようだ。

さ「上等よ。かつ飛ばしてやるわ！」

杏「ふん、トーシロが。(あれ？ 前にも言ったことあるような…)」

〈瞬殺つしよ〉へトーシロ〈、この言葉が何故か頭に引つかかる。

両者が対立したまま試合が進行し、やがて、ぶつかる時がきた。

さ「さあいい！」

杏「ふん。」

ギョーンツ!!

さ「なっ!!」

一投目。杏子が投げた豪速球は、瞬く間にキャッチャーのグローブに吸い込まれた!

杏「口ほどにもないよね。」

さ「っ、ナメるんじゃないわよ!(なに?この懐かしい感じ…)」

さやかは違和感を感じた。初めて会う相手に放った言葉が何故か頭に引っかかる。

ま「あ、美樹さんが打てなかった。どうしよう、仁美ちゃん!」

恭「さやか、頑張れ!」

仁「!」

ま「仁美ちゃん?」

恭介は少し離れた観客席にいた。仁美は恭介に駆け寄った。

仁「こんにちは、上条君。」

恭「ああ、こんにちは。」

仁「美樹さんの応援にきましたの？」

恭「うん、さやかが見に来てくれてうるさくてさ。」

仁「まあ！上条君だってやりたいことがあるはずなのに。」

ま「仁美ちゃん、試合見ようよ…。」

続く二投目。バットに当たりはしたが、あいにくファールだ。

さ「ちっ。」

杏「少しはやるじゃん。でも、終わりだよ！」

ギョーンツ!!

さ「負けるもんかあ！」

キンツ!!

杏「なっ！」

三投目。さやかは渾身のヒットをかました!

ま「やったあ!」

恭「よし!」

仁「あの、私の話、聞いてますの?」

恭「え? ああ、聞いてるよ。」

それから奮戦は続いたが、縦浜中が勝利して試合は終わった。

さ「もう一息だったのに…。」

杏「…、おい8番。」

さ「何よ、笑いに来たの?」

杏「アンタ結構やるじゃねえか。アタシのボールを返した奴なんてあんまりいなかったぜ。」

さ「お、大きなお世話よ。」

杏「照れんなくて。また試合しようぜ。アタシは佐倉杏子。」

さ「あたしは美樹さやか。次こそは絶対に勝ってみせるから!」



2人は握手した。

ま「美樹さん、残念だったなあ。」

恭「惜しかったよ。」

仁「…次こそは勝てますわ。」

そんな観客席に、マリアがやってきた。

武「まどか、やっぱここにいたんだな。」

ま「あつ、マリアちゃん。なんでここにいてわかったの？」

武「ママさんから聞いたぞ。家にいないなら中学校に来てるって。」

ま「流石ママさん…。」

武「つて、横にいるのつてもしかして志築仁美と上条恭介!？」

仁「え？」

恭「なんで僕の名前を知ってるんだ？」

ま「あ、ごめんね。マリアちゃん、こういうところがあるからあまり気にしないでね。」

武「なるほどな。仁美は見た目通り何でも出来そうな人だな。」

仁「何ですの、この娘…。」

武「そして上条恭介は…、あれ？イメージと違う。」

恭「何が？」

武「もつと憎たらしい面してると思ってたぞ。」

恭「なんで!？」

武「ま、こつちの話だがな。やっぱり2人は付き合ってるんだな。」

仁「あらあ、そう見えます？」

嬉しそうだ。

恭「いやいや、僕は志築さんとじゃなくてさやかと付き合ってるんだけど。」

武「え？ええええつ！」

急に突っかかって来たり、大声出したりと、側から見ればおかしな子だ。

仁「(はあ♡やはり上条くんにお似合いなのは私ですね。)」

ま「仁美ちゃん、顔赤いよ。」

恭「まあ、初めて言われることじゃないけど。」

同級生からも、さやかとは合っていないと言われるらしい。

武「さやかと付き合ってるってことは、この世界にも…」

さ「恭介ー、早く帰るわよー。」

観客席にさやかと杏子がやってきた。

仁「私は帰りますわね。」

ま「じゃあね、仁美ちゃん。」

武「！ 美樹さやかだあ！」

さ「え？なに？」

杏「なんだお前。」

武「それに佐倉杏子までいる！探す手間が省けたぞ！」

杏「なんかウゼエ。」

さ「あたしってそんな有名な人だっけ？」

杏「違うぜさやか。こいつはただの不審者だ。」

さ「そこまで言わなくても。」

武「あたしは武呂マリア、お前たちを勧誘するために声をかけたんだぞ。」

ま「勧誘？」

杏「怪しい。ていうかなんで上から目線なのさ。」

さ「もしかしてソフトボールのプロ入りとか？」

さやかだけノリが違う。

武「もっとすごいことだ。」

「お前たち、魔法少女にならないか？」

自信満々の表情で言った。

さ「ごめん杏子、やつぱり不審者だわ。」

武「待てよ！お前たちは物凄い魔法少女になれるんだぞ！」

小説をあたかも現実かのように問いかけた。

杏「あんまりしつこいと、通報するよ。」

ま「ご、ごめんね！杏子、ちゃん？」

杏「アンタ誰だ？」

ま「わたし、鹿目まどか。」

杏「鹿目、まどか…？その名前どつかで…」

ま「え？会ったことあったかな？」

杏「いや…、気にすんな。」

杏子は戸惑った。自分の記憶に自信がなかったのは初めてだからだ。

ま「一旦ここは離れようよ。じゃあね。」

小声でマリアに囁き、マリアを引つ張りその場を後にした。

武「さやか! あたしはお前の生き方に憧れて、魔法少女になったんだぞ!」

まどかとマリアは行ってしまった。

杏「なんだったんだあの2人。」

さ「ま　ど　か　?」

杏「おい、どうしたんだよ。」

さ「:何でもないわ。」

恭「終わった?」

さ「あ、待たせたわね。」

杏「それじゃあな、さやか。」

さ「バイバイ!」

「恭介、帰りにスターボックス行こうよ。」

恭「これからヴァイオリンの練習なんだけど。」

さ「しようがないわね。ちよつとだけ、ね?」

恭「わかったよ。」

微笑んださやかに微笑み返した。

・  
・  
・

〔校門〕

ま「マリアちゃん、なんで美樹さんや杏子ちゃんにあんなこと訊いたの？」

武「そりゃ小説の中ではあの2人も魔法少女だからだ。」

ま「え？ そうなの？」

武「あたしは特にさやかが好きなんだ。会えて興奮したぞ！」

ま「美樹さんが魔法少女か。…うっ！」

走馬灯のように、まどかの頭の中に何かが映った。自分の前に立ち、異形の生物に立ち向かう美樹さやかかの姿だ。

見たことも想像したこともないが、現実味がありすぎた。

武「お、おい、お前もかよ。」

ま「な、なにが？」

武「昨日ママさんも同じように苦しんだんだ。あたしのせいかな？」

ま「そ、そんなことないよ。わたし、マリアちゃんといて楽しいよ？」

武「流石は親友つてところだ。」

ま「親友？」

武「おいおいそんな反応はないだろ。」

ま&武「あははは」

その後、まどかはマリアを連れてファミレスに行き、昼食をとった。

マリアの世界には、ファミレスのような一般市民向けの飲食店は存在しないらしく、かと言って高級レストランに行ったこともないので、マリアには見るもの全てが輝いていた。

特にドリンクバーを気に入ったそうだ。

武「ほんとにいくらでも飲んでいいのかな？」

ま「うん、お金さえあればね。」



武「ママさんからちよつと貰つてるから大丈夫だ！このお金は知らないけどな！」  
ま「大丈夫かな…。」

・・・

〔ほむら邸前〕

武「ここだな。」

ま「そうだけど、わたしは、あんまり…。」

武「？ 嫌いなのか？」

ま「き、嫌いじゃないけど、嫌われてるみたいで。」

武「あれ？確認だけど、ここは暁美ほむらの家だよな？」

ま「うん。」

武「おかしいな。小説の中ではほむらはまどかのことが大好きなんだけどな。」

ま「ええ！」

ピンポーン

ま「な、なんで鳴らしたの?」

武「そりや勧誘するためだぞ。」

ま「あのままじゃ失敗しちゃうよお。」

ほむ「何かしら。」

すぐに出てきた。

武「お前がほむらだな?」

ほむ「そうだけど、貴女は誰?」

武「あたしは武呂　マリア、15歳の魔法少女だ!」

ほむ「は?」

武「お前、魔法少女にならないか?小説では、お前はなかなか強いって設定だぞ。」

ほむ「スカウトはお断りします。」

武「違う、そういうことじゃない。お前は時間停止や時間遡行の能力を持つすごい魔法少女だぞ。」

ほむ「鹿目まどか、私には近づかないと約束した筈よ。」

ま「えっと、その、ごめん。マリアちゃんが、暁美さんに会いたいって、言ってたか

ら。」

ほむ「貴方が来る理由にはならないわ。消えなさい。」

武「無視すんな、ていうかなんだその言い方！」

ほむ「わかる筈よ、私は鹿目まどかが嫌いなだけ。」

武「ほむらつてこんな感じ悪いのかよ。小説の中ではまどかを何としてでも守ろうとする、カッコいい奴なのに。」

ほむ「さつきから何を言つて……うっ！」

ま「暁美さん！」

ほむらに頭痛が走った。〈時間遡行〉へまどかを守る、この言葉が何故か頭に引つかかる。

ほむ「ぐっ……帰つて。」

ま「え、でも。」

ほむ「いいから帰つて！」

ま「……ごめん。」

武「行くぞまどか。こんな奴を魔法少女だと思つたあたしが間違いだつた。」

まどかとマリアは帰っていった。

ほむ「う、うううう！」

頭痛は治まったが、今度は胸が苦しくなった。

ほむ「なんで、なんでなのよ。嫌いな人を罵っただけ。顔も見たくない相手に暴言を吐いただけ。」

「なのに、なんで鹿目まどかだけは、こんなに苦しいの……?」

この症状は、マリアがやって来る前からのことであった。

鹿目まどかを嫌う理由は、特にない。生理的に受け付けないだけであった。

しかしこの時、その症状が悪化した。時間遡行という言葉により何かが開きかけたせいだ。

その何かは、今のほむらには知る由もない。

第4話へ、続く。

## 第4話「これ以上のことはできないぞ」

### ●魔法少女データ●

??武呂 マリア

・メリケンサックを武器に闘う魔法少女。

・先輩には敬語を使うが、同い年と判断した相手には結構厚かましい。

・明るく勝気だがその反面、寂しがりな一面もある。

・何を願って魔法少女になったかはまだわからない。

・彼女がいる世界では、「魔法少女まどか☆マギカ」の一部のストーリーは小説の話で、

その魔法少女の間ではかなりの知名度を誇っており、彼女も感化された一人だ。

・ひよんなことから別世界にやってきて、小説に登場した5人を魔法少女にするため

に勧誘するが…。

くまだ誰も知らない物語く 第4話

「まどかの教室」

マリアがやってきたからはや2週間。何事もなく時は流れ、もうすぐ夏休みが始まる季節となった。

ま「〜♪」

まどかは授業を聞かずに、ノートに落書きをしていた。

仁「まどかさん、授業を聞かないと駄目ですよ。」

ま「えー、でも暑くて勉強に集中できないよう。」

仁「まあ！このままだと巴先輩の高校に行けませんわよ。」

ま「んー。」

まどかにはやる気がなかった。確かに暑さも影響しているが、ここ最近には単にモチベーションが上がらないのだ。

ま「はあ（いいなあ美樹さんは。誰からも注意されないし。）」

さ「zzzz…」

さやかは、居眠りしているため授業を聞いていない。

ま「(わたしも暁美さんみたいに、何でもできる女の子になってみたいなあ。)」

ほむらは勉強もスポーツもできる、いわゆる優等生だ。

ま「(わたしも、魔法少女とかだったら、こんな格好なのかなあ。)」

仁「そう言えば、ノートに何を書いていますの？これってもしかして鹿目さん？」

ま「ち、違うよう！」

早乙女「鹿目さん、お静かに！」

ま「ふえ、ごめんなさい。」

早乙女とは、このクラスの担任の先生だ。

ま「これは、昔あった魔法少女の番組に出てたやつで。」

仁「そうなのですね。」



勿論嘘だ。

ま「はあ。」

ため息ばかりついた授業であつた。

・  
・  
・

〔屋上〕

昼休憩の時間になり、いつも通り、まどかと仁美は屋上で弁当を食べようとしていた。

仁「あ、ごめんなさい。教室に単語帳を忘れたので取りに行きますわ。」

ま「えー、お弁当食べながら勉強するの？」

仁「勿論ですわ。頑張らないと合格しませんもの。」

ま「えらいなあ、仁美ちゃんは。」

仁美は小走りで教室へ行った。

階段を降りる途中、反射して光る何かを見つけた。

仁「これは、カプセル？」

何も書かれていないカプセルを拾った。

特に関心を持たなかったもので、捨てようかと思ったが、ゴミを放置はできなかった。

何気なくポケットに入れ、教室に着くと、恭介とさやかが一緒に弁当を食べている光景が目に入った。

いつものことではあるが、さやかが一方的に話している様子だ。

仁「∴。」

極力見ないようにしたため、2人はそんな仁美に気づかなかつた。

仁「（上条君の隣は私が相応しいはず。なのに、何故美樹さんなのですか？）」

仁美は知らなかった。その思いを抱いた時、拾ったカプセルが禍々しいオーラを放っていたということを。

? 「…。」

•••

〔校門前〕

武「お、まどか。」

ま「マリアちゃん。」

一日の授業が終わり帰ろうとしていると、マリアが待っていた。

仁美は今日も塾があるため、既に学校には居ない。

ま「マリアちゃんは、学校ないんだよね。」

武「元々、この世界にあたしは存在しないはずだからな。学校なんて行けない。」

ま「いいなあ。」

武「そうか？あたしと同一年の魔法少女は、闘いたくないってよく言ってたぞ。」

ま「そうかなあ。」

武「ま、あたしも闘う方が得意だからよくわかんないけど。」

ま「そう言えばマリアちゃんはいつも何してるの？」

武「マミさんの部屋の掃除したり、トレーニンブルームに行ってるな。」

ま「へー。なんでトレーニンブルームに行くの？」

武「変なこと聞くんだな。勿論鍛えるためだぞ。」

「いつ元の世界に戻っても、すぐに闘えるようにな。」

ま「マリアちゃんは頑張り屋さんだね。それに意外と女の子っぽいし。」

武「女の子っぽい？」

ま「掃除もするし、ちゃんとハンカチ持ってるし、マリアちゃんもやっぱり女の子だ

よ。」

武「て、照れ臭いな。」

ま「テイヒヒヒ」

武「ハハハッ」

微笑ましい会話を、

ゴオオツ!!

爆音がかき消した。

武「!」

ま「なにつ!」

音がした方を向くと、煙が上がっていた。

あのビル街は、見滝原市の隣街の風見野市だ。

ま「あ!待ってよマリアちゃん!」

マリアは、燃える街へ走った。

・  
・  
・

〔風見野市街地〕

人々「ウワアっ!!」

人々は逃げ惑う。各地で火事になっているからだ。

消防隊員「此方です！早く避難してください！」

懸命に声をかけ、消火活動をしているが、火はどんどん広がる。

消防隊員「なんだ、あれは…。」

炎に包まれたビル街に、巨人のような何かが立っていた。

??「∴。」

消防隊員「これは、あいつの仕業だな。」

「軍に知らせなければ。此方消防隊、軍を派遣するよう連絡してください」  
ボオオオッ!!

??「キヒイイ」

一瞬にして、消防隊員と消防車は消し炭になった!

•  
•  
•

〔縦浜中学校〕

市街地の大火により、ここ縦浜中学校は、一時的に避難所になっていた。

杏「みんな！こっちだ！早く避難しろ！」

杏子は避難の手伝いをしていた。口は悪いが、一生懸命声をかけている。

武「この辺なら思いつきり闘えるぞ。」

ま「はあ：はあ：速いよ、マリアちゃん：」

武「何だかんだ言つて、ちゃんと追いついてるじゃないか。」

まどかとマリアは、縦浜中学校付近の大きな交差点まで来ていた。

ま「マリアちゃん、なんで、街に行かなかつたの？あっちの方が大変なことになつたのに。」

武「この事件は間違はなく怪魔の仕業だ。あそこまで燃え上がっていたら分が悪い。」  
ま「でも、まだ残つてた人だつてきつといたよ。マリアちゃんなら助けられた筈だよ？」

武「その人を助けられたとして、そのせいであたしが死んでしまえばもつとたくさんの人が死ぬことになる。」



「だから場所を選んだんだ。これ以上のことはできないぞ。」

ま「そんな…、そんなのって…」

武「！ 来た！」

ビルの隙間から、爆炎が吹き出した！

近くにあった自動車は、燃料に引火し大破した。

武「まどか、お前もあの中学校に避難しろ。」

ま「…闘うんだね。」

武「ああ。」

左腕に付けたブレスレットを胸にかざした途端、マリアが光り始めた。

武「行くぞっ!!」

カアツ!!

あつという間に、マリアは魔法少女へ変身した！

武「来いっ！」

炎の中から、身長10m、頭がハヤブサ、身体が人間でできた、槍を持った巨人のような怪魔が現れた！

Quebec avenue

武「お前は…、新種らしいな。」

??「ヒイイ」

武「お前、ケベフセヌエフっていうのか。」

マリアは怪魔の言葉がわかる。一般人にはわからない。

武「覚えたぞ。絶対、倒してやるぞ！」

ケ「キイイツ！」

ガキツ!!

マリアは頭部目掛けて跳び上がった。  
右ストレートを決めようとしたが、槍で防がれた。

武「太い槍だな。」

「でも、あたしの攻撃を受け止めたとして、このあたしを倒すことはできないぞー！」

相手の槍に掴まり、踏み台にしさらに跳び出し、

ドゴツ!!

ケ「カツ！」

額に重い一撃を与えた!

追撃するために、まぶたに掴まり再度攻撃しようとしたが、ケベフセヌエフの左手に  
捕まってしまい、

ギユンツ!!ドゴオツ!!

武「ぐがっ！」

下へ投げつけられ、地面に叩きつけられた！

武「このっ！」

脅威の生命力ですぐに動き出し、敵の足下をパンチしようとしたが、

バサッ！！

武「な、なんだと！」

急に背中から翼が生え、飛び上がった。これでは闘うことができない。

杏「どういうことだオイ…。あんな化け物がこの世にいるのかよ。」

ケベフセヌエフが飛んだことで、そこまで距離がない縦浜中学校にいた杏子の目に入った。

ま「杏子ちゃん、無事だったんだね。」

杏「まどかか。あれ、どういうことかアンタは知ってるのか？」

ま「ごめん、わたしも、わけわかんなくて。」

人々の目には、夕方の空に悪魔が舞い降りたように見えたに違いない。

武「あたしだって、対空手段はあるぞ！」

両手を前に突き出し、拳を握りしめ、合わせた。

すると、両手が光り、

武；「メリケン・エネルギーガン」

武「はっ！」

ドンツ!!ドンツ!!

敵を狙って、光弾を発射した。そして、

ボンツ!!

ケ「キツ！」

腹に命中した。

武「？ あまり効いてないのか？ くそっ！」

ドンツ!! ドンツ!!

しかし、巨人が素早く飛行するせいでなかなか当たらない。

武「はあ、はあ。」

ケ「カカツ！」

疲労し、攻撃を一旦やめたこの一瞬が命取りとなった。

ケベフセヌエフは、紅蓮の炎に包まれた槍をマリアに向け、急降下したのだ。

武「突撃か。来いっ！」

その予測は間違いであった。

高さ15mの地点で、ケベフセヌエフは槍の先から火炎弾を放ち、自分は上へはね上がったのだ！

武「なにい！」

ドカーンツ！！

ま「きやあつ！」

杏「うわっ！」

爆風により、縦浜中学校のグラウンドまで吹き飛ばされた。

杏「いつてえ。」

ま「マリア、ちゃん？」

先ほどまで穏やかだった交差点は、火の海になっていた。メラメラと燃えており、人があの中で生きているとは思えない。

ま「そんな、こんなのって…。」

杏「よしな。あの近くにいた人なんて、もう生きてはいないさ。」

ま「こんなの、あんまりだよ。」

泣きながら言った。

杏「友達がいたのか。その、残念だったな。」

ま「うええん」

杏「とにかく、体育館に避難するぞ。早く逃げないと、いつさっきの化け物が現れる  
かわかったもんじゃない」

ドン

杏「なっ…」

ま「あ…あ…」

2人の目の前に、ケベフセヌエフが降り立った。

槍を持ったまま、じっと睨んでくる。



まどかは失禁してしまった。

杏「(ちくしょう、どうすれば…。)」

風見野市に突如現れた、謎の怪魔。

この怪魔は何なのか？

まどかと杏子はどうなってしまうのか？

第5話へ、続く…。

## 第5話「その言葉に、二言はないわね」

### ●怪魔データ●

??炎神の怪魔 ケベフセヌエフ

・その性質は守護。

・古代遺跡の壁画に描かれた鳥類の頭部を持つ人間の絵に、途絶えてしまった当時の民族の無念が密集し誕生。

・恨むべき民族も消えてしまったため、永遠に眠るはずだったが、現代人が遺跡を大々的に観光スポットにしたがために歓喜し、眠らなかつた。

・槍術の達人でありながら、炎を司る。

・この怪魔に熱攻撃は全くの効果がなく、また、正面から掛かっても戦況は困難を極める。

・この怪魔を倒したければ、一瞬の隙を突き身体のバランスを崩すことが重要となる。

くまだ誰も知らない物語く 第5話

「縦浜中学校グラウンド」

杏「(ちくしように、あの槍をどうにかしねえと。)」

「(あれ?なんで、槍なんか懐かしさを感じるんだ?)」

杏子に槍など縁がない。なのにケベフセヌエフの槍を見ると、槍を振り回したくてうずうずしてしまうのだ。

杏「(それにさっきの爆発、アタシもまどかもこんなかすり傷じゃ済まねえ筈だ。いや、アタシの認識が間違ってるのか?)」

ま「…。」

現状、杏子は立っているが、まどかは膝をつき半分失神している。

ケ「…。」

杏「(たぶん、急に動いたら向こうも動いて殺される。)」

両者は見合っている。

と、次の瞬間！

ボオツ!!グシヤツ!!

ケ「キイツ！」

炎をかき分け、何かがケベフセヌエフの両のアキレス腱に飛んで行った！

杏「!!」

ま「え？」

さらに、炎の中から何者かが飛び出し、ケベフセヌエフの背中を蹴飛ばし、前方へ倒した。

杏「まずい！まどか！」

まどかを抱え、倒れてくる巨人を回避した。

ま「マリア、ちゃん？」

武「ふう、どうなるかと思っただぞ。」

倒れたケベフセヌエフの背中に立っているのは、焼け死んだ筈のマリアではないか！

ま「マリアちゃん！」

杏「お、お前……。」

武「話は後だ。2人とも離れてろ。」

まどかと杏子はすぐに距離を取った。

マリアのメリケンから棘が無くなっていたが、瞬時に再生させ跳び上がった。

武「よし、トドメだ！」

武；「メリケン・ドリルスピナー」

頭を下にし落ちながら、魔力で光った両手を下へ突き出し回転した。

ケ「キヒイ！」

武「？」

仰向けで倒れているケベフセヌエフは、咄嗟に槍を直感で突いた。その直感の中のし、マリアへ襲いかかる。

武「そんなのお見通しだぞ！」

が、マリアは予測していたらしく、回転を使って見事に躲した！  
メリケン・ハンマーを使わなかったのは、このためだったのだ。

武「はあああつ！」

ズガツ！！

ケベフセヌエフの心臓部を貫いた！

ケベフセヌエフは黙ったまま絶命し、パアツ！と、光となって消え、カプセルだけを残した。

武「終わったな。」

変身を解いた。

ま「マリアちゃん！うええん！」

武「へへへ、まどかを置いて死ぬわけないだろ？」

煙の匂いなど気にもせず、マリアに泣いて抱きついた。

するとまた、滴が水面に落ちたような音が聞こえたような気がした。

武「？」

杏「なんだ？今の音。」

武「さあな。よしよし。」

ま「ンフツ」

少し経つと消防隊が到着し、消化活動が行われた。

魔法少女のマリアや怪魔には気づいていないらしく、3人は何も聞かれなかった。

ま「じゃあね、杏子ちゃん。」

杏「おう。あ、マリア。」

武「何だ？」

杏「その、ありがとな。」

武「やっぱり、杏子は優しいんだな。物語通りで嬉しいぞ。」

杏「バ、バカ言うんじゃないわねえ！」

杏子は避難所に戻り、まどかとマリアは見滝原へ帰っていった。

・  
・  
・  
・

〔鹿目邸〕

まどかの誘いで、マリアはまどかの家に寄った。シャワーを借りるためだ。



ま「ただいま。」

知「おかえり。隣の子は？」

ま「マリアちゃんだよ。お友達なの。」

武「こんにちは。」

知「こんにちは。そうか、お友達か。」

「ところで、2人ともえらく汚れてるね。」

ま「その、いろいろあつて。」

知「もしかして、風見野市の火災に巻き込まれたのかい？」

ま「そうなの！でも、マリアちゃんが助けてくれたんだよ。」

知「そうか、ありがとう。」

武「い、いえ！」

知久は笑顔で言った。

ま「パパ、なんで知ってたの？」

知「ニュースを見たんだ。大変なことになってることは知ってるよ。」

武「そんなおおごとになってたんですね。」

知「そうそう。ところでまどか。」

ま「なに？」

知「マリアちゃんからは焦げの臭いがするけど、まどかからは違う臭いが」

ま「それは言っちゃダメ！」

知「わっ、どうしたんだい？」

ま「マリアちゃん、早くシャワー浴びよ！」

武「お、おう。」

早歩きで洗面所へ向かった。

武「おいまどか。」

ま「マリアちゃん、先に入ってくれないかな？」

武「わかった。そりゃ、汚れたパンツは見られたくないもんな。」

ま「え！知ってたの？」

武「臭ったからな。あの時から。」

ま「…内緒にしてくれて、ありがとう。」

武「お安い御用だぞ。さて、身体洗うか。」

ま「そう言えば、ソウルジェムは大丈夫なの？」

武「上がったら補給するぞ。」

2人は身体の隅々まで洗った。

•  
•  
•

着替えを済ませ、一息ついた。

ま「さっぱりしたね。」

武「毎日身体を洗えるなんて夢みたいだぞ。」

ま「向こうではそうだったの？」

武「まあな。」

ま「そんなの、あんまりだよ。」

武「あたしはそれで慣れてたしな。今は楽しいぞ。」

ま「もうここに住んじやえばいいのに。」

武「ハハ、それもいいかもな。」

が、おもむろにケベフセヌエフのカプセルを取り出し、ソウルジエムに差し込もうとした

ドオンツ!!

武「!」

ま「え!」

それを許さぬ輩が現れたようだ。

ま「行くの?」

武「行くしかないぞ。」

ま「でも、ソウルジエムの光が弱まってるよ。」

武「ま、ヤバいと思ったら逃げるから大丈夫だぞ。」

階段を降りた。

武「お邪魔しました。」

知「気をつけてね。まどか、何処へ行くんだい？」

ま「ちよつと用があつて。」

2人は夜になろうとする見滝原を駆け抜けた。

•  
•  
•  
•

〔廃墟〕

武「魔力の反応はこの辺りからだ。」

マリアはソウルジェムを使って、音の犯人がこの廃墟にいることを突き止めた。

ま「暗いよ、怖いよ。」

武「大丈夫、あたしが着いてるからな。」

見滝原はすでに夜だった。

武「近いな。よつと。」

カアツ!!

敵を察知し、変身した。

ま「やっぱりマリアちゃんはカツコいいなあ。」

武「ありがとう。」

「よし、どこからでもかかってこい！」

自信満々で構えた。

？「その言葉に、二言はないわね。」

シユルルツ!!ギユツ!!

武「なっ！」

どこからともなく紐が飛んでき、マリアの右腕に巻き付いた！

ま「マリアちゃん！」

武「くそっ、誰だ！」

暗闇の中から、一人の少女が姿を現した。

？「あら、誰かと思えばマリアじゃないの。」

武「お前は…。」

忠「知らない子もいるから自己紹介しておくわ。ワタクシは忠岡誠。マリアと同じ魔法少女よ。」

ま「魔法少女？なんで2人もいるの？」

忠「最初の質問がそれなのね。」

武「お前、何しに来た？」

忠「あのお方からの命令。マリアを始末するようにと。」

武「何の冗談だ！」

忠「そーれ！」

武「うわっ！」

ドゴツ!!

誠は紐を振り、巻き付かれたマリアを壁にぶつけた。

ま「マリアちゃん！」

武「いつて。」

忠「流石にしぶといわね。」

「でも、いつまで持つかしら？」

武「くっ、絶対に、お前を倒す！」

やったの思いでケベフセヌエフを倒したのに、すぐに新手が現れ大ピンチ。マリアは、魔法少女を名乗るこの人物に勝てるのだろうか？



第6話へ、続く！

## 第6話 「ととてもとても腹が立ちます」

「まだ誰も知らない物語」 第6話

「廃墟」

武「ちっ！こんなもの！」

右腕に巻きつく紐を、左手で握った。

忠「何のマネかしら？」

武「…やっぱ、電気は通さないみたいだな。」

忠「そうよ。ワタクシの紐は不導体でできてるもの。」

武「捨て身の電撃作戦がダメなら、こうだ！」

タッ！

忠「！」

正面へ駆け出した。すると、張らなくなった紐は拘束力を失い、マリアを抑えられなくなった。

武「オラっ！」

ドゴツ！

忠「がはっ！」

腹に強烈な一撃を与えた！

誠は後方へ吹っ飛んだ。そのおかげで、

武「今度はこつちの番だ！」

ドゴツ!!

主導権はマリアへ移った！

右腕を左方へ振り、柱にぶつけた。

忠「…。」

武「まだまだだ！」

ドゴツ!!

次に右方へ振り、壁にぶつめた。

忠「…。」

武「オラっ！」

ドゴツ!!

右腕を振り上げ、天井にぶつめた。天井に穴が開いた。

忠「…。」

武「よし、トドメだ！」

ドゴンツ!!

一気に右腕を振り下ろし、地面に投げつけた。

ま「やったあ！」

武「へっ、終わったな。」

油断はできないので、歩いて誠に近づいた。  
すると倒れている誠は、急に腕を振り上げた。

ゴオンツ!!

武「なんだ!？」

ま「なに?」

遠くから地響きのような轟音が聞こえた。

武「おい、何をした?」

忠「それは行って確かめたらどうでしょう?」

武「ちっ!」

マリアが推測するに、音の発生源は見滝原だ。

武「まどか、お前は戻ってくれ。」

ま「な、なんで？」

武「あたしは、こいつを見張らないといけない。」

「もし怪魔が現れていたなら、いち早く住民に知らせ避難に協力してくれ。」  
ま「わ、わかった。」

とは言われたものの、おどおどしている。

武「早く！」

ま「う、うん！」

やつと走り出した。

武「…行っただか。」

忠「いいんですか？ワタクシなんか構っていて。」

武「抑えられる方を選んだだけだぞ。」

忠「なるほど、もう魔力が残ってないんですね？」

ニタアつと笑った。

武「気づかれていたか。」

忠「勿論です。もし魔力が残っていたなら、魔法を使った攻撃でワタクシをもっと追いつめる筈。」

「なのにワタクシを振り回してばかりか、被害が拡大するであろう街の方へ行かない。」

武「うるさい。」

忠「凶星ですね。」

「そして、ワタクシなら抑えられるという誤算が最大の敗因。」

武「は？」

ゴツ！ゴツ！ゴツ！ゴツ！

武「なっ！」

シユルルツ！！ギユツ！！

なんと、誠をぶつけた4箇所から紐が飛んできたではないか！  
4本の紐はそれぞれ、左腕、右腕、左腕、右腕、首に巻きついた。

武「うっ！がっ」

忠「アハハ！作戦成功！」

強く固定され、全く身動きが取れない。

武「あっ…、ぐ…」

忠「ワタクシはね、アナタが邪魔で邪魔で仕方なかったんですよ。」

「幹部クラスのワタクシに張り合おうだなんて、とてもとても腹が立ちます。」

武「…っ」

忠「これは預かっておきましょう。」

ブチッ！

左手から生えていた、マリアの右腕を縛っていた紐を千切った。  
そして、マリアのポケットから、2つのカプセルを取り出した。



忠「あのお方からの命令というのは嘘。なので、あのお方への報告として、」  
「アナタはワタクシの任務を妨害した、という筋書きはどうでしょう？」

武「……！」

シユルルツ!!ギユツ!!

左手から新たに紐を生み出した。

それは、2階分上の天井の割れ目に巻きつき引っ張り、

忠「サヨナラ。」

武「ーっ！」

ゴゴゴゴツ!!ドオンツ!!

廃墟を一気に倒壊させた。

両者共に瓦礫の下敷きになったが、誠は魔法で防壁を築いていたので、ほぼ無傷であつた。

忠「やつと居なくなつた。これならソウルジエムも砕けた筈。仮に無事でも、魔力が足りず絶命する。」

「もうすぐですよ陛下。もうすぐこの世界は陛下のモノに。」

崩れた廃墟を後にし、歩いて行つた。

.....

〔見滝原ビル街〕

すっかり暗くなつた街を、まどかは見滝原のビル街まで走つた。

着いてみると、市民はどよめいている。

無理もない。車道の中央に突如、黒い鉱物の塊のようなものが現れ、道をふさいでしまつたのだから。

ま「何、これ？ やつぱり怪魔？」

く。高さは10m程。固まって動かないが、この世の物ではないことぐらいの予想はつ

ま「あ、そうだ。みんなー！避難してー！」

しかし、大衆は耳を貸さなかった。まどかの声が小さいということもあるが、聞こえていた者も1人の少女の言葉など真に受けない。

ま「みんな、聞いてよ…。」

そんな中、一台の車が近づいてきた。運転していたのは、まどかの母詢子だ。

詢「まどか、こんなのに構ってないで乗りなさい。」

ま「ママ、あの…。」

詢「車出せなくなるから早く。」

ま「う、うん。」

助手席に乗った。

詢「まどか、ああいうのはロクなもんじゃないからな。無視が一番さ。」

ま「うん。でもね、凄く嫌な予感がするの。」

詢「隕石か何かだろうさ。すぐに収まるよ。」

ま「…。」

詢「？ 何か言いたいことでもあるのかい？」

詢子にはお見通しのようだ。

ま「その、友達とはぐれちゃって。」

詢「パパから聞いたよ。急に友達を呼んだかと思えば急に出て行っちゃって。何処へ行ってたんだ？」

ま「え、それは…。」

言えなかった。廃墟に行っただけと言えれば叱られるということもそうだが、怪魔や魔法少

女など信じてくれる筈がない。

詢「言えねえつてか。まあ、何処へ行こうが外出禁止とかうるさいことは言わないけどさ。晚メシの前には一本入れなよ。」

ま「うん、ごめんね。」

こうして、まどかは無事家に帰ることができた。

マリアが廃墟に埋もれたということは、まだ知らない。

第7話へ続く。

## 第7話「そこは、私の場所です」

### ●魔法少女データ●

#### ??忠岡 誠

- ・ 紐を自在に操り闘う魔法少女。
- ・ 基本誰にでも敬語を使う。
- ・ 沈着冷静な人物であり、武呂 MARIA に勝ったふりをさせ一気に逆転してしまう策士である。

・ 何を願って魔法少女になったかはまだわからないが、彼女が言う〈陛下〉に関係がありそうだ。

・ MARIA とはお互い顔見知りで、両者共に良い印象を持っていないようだ。

・ 彼女がどうやってこの世界にやって来たのか、何が目的なのかは謎に包まれている。  
くまだ誰も知らない物語く 第7話

「見滝原市のデパート」

この日は夏休み前最後の土曜日。見滝原市にあるエオンモール見滝原テラスというデパートには、さやかと恭介がデートしに来ていた。

さ「つーわけで、シヨツピングに付き合ってもらおうわよ！」

恭「夕方にヴァイオリンのレッスンがあるから、それまでに終わらそうね。」

さ「もー、たまにはヴァイオリンのことなんか忘れてあたしに夢中になつてよねー。」

恭「ヴァイオリンなんか、なんて言いかたしなくても。」

さ「とにかく行くわよ！」

とは言え中学生なので、高い買い物はできない。時間はあまりかからないだろう。

•  
•  
•

エオンの別のフロアには仁美も来ていた。ピアノを見に来ていたのだ。

仁「新しく買うならどれにしようかしら。」

最新のピアノはやはりどれも性能がいい。もしも買うなら、と考えてしまうとなかなか決められない。

仁「っ、あれは…。」

2人一緒に歩くさやかと恭介を見かけた。

仁「(酷い、上条君にばかり荷物を持たせて。)」

手ぶらのさやかに対し、恭介は両手に紙袋を持っている。

仁「(我慢なりませんわ。一言言わないと!)」

ほむ「志築さん、何をしているのかしら。」

仁「暁美さん!?!」



背後にほむらがいた。

ほむ「静かに。上条恭介がこつちに来るわ。」

仁「え！」

2人は身を隠した。

さ「ちよつとー、こつちには用ないんだけど。」

恭「ヴァイオリンを見たくてさ。ちよつとでいいから持つといて。」

さ「あ！」

買った物をさやかに渡し、ヴァイオリンの方へ向かった。

恭「これがいいかな？これもいいな。」

さ「まだー？」

恭「まだまだだ。おつ、これもいいかも。」

さやか「の表情が次第に暗くなっていく。」

仁「一所懸命にヴァイオリンを漁る上条君、可愛いですわあ。」

ほむ「私はこの辺で。」

仁「駄目です。」

ほむ「どうして？」

仁「一緒に見ましようよ。尾行も楽しいじゃないですか。」

ほむ「はあ。」

ほむらは帰れなかった。

さ「…もー、まだなのー？」

恭「よし、そろそろ行こう。」

「さやかはヴァイオリン好きじゃなかったっけ？」

さ「別に。だって、あたしが好きなのはヴァイオリンじゃなくて、演奏してる恭」

恭「お腹空いたな。3階に行こう。」

さ「え？…わかった。」

さやかが言いかけた言葉こそ、何よりも先に伝えるべきだった。

仁「もどかしいですわね！」

ほむ「動いたわ。」

仁「行きますわよ！」

ほむらも少し乗り気のようにだ。

・・・

「フードコート」

恭「さやか、結構食べるんだね。」

さ「そう?」

うどんを食べているのだが、並を頼んだ恭介とは違いさやかは特大を頼んでいる。

恭「たくさん食べると太るよ。」

さ「なっ！どーゆー意味よ！」

いつになってもいい雰囲気にならない。

仁美とほむらは、少し離れた席でポクドナルドのポテトを食べていた。

仁「どうして楽しく食事をとれませんの？」

ほむ「知らないわ。でも、なんでかしらね。あの方が自然に見えてしまうのは。」

仁「きつとお似合いではないからですわ！」

ほむらはそんな単純なものではないことはわかっている。しかし、それがわからな  
い。

さ「あたし帰る。」

恭「え！急にどうして。」

さ「だって、恭介と居るのに全然楽しくないんだもん。」

恭「そんなこと言われても。」

仁「∴。」

ほむ「ちよつと、志築さん。」

仁美は席を立ち、カップルへ歩み寄った。

さ「志築さん？」

恭「な、なんでここに？」

仁「どうして、上条君に優しくできないんですか？」

さ「あなたには関係ないでしょ。」

ほむ「！」

その時、ほむらだけが気づいた。仁美のポケットから禍々しいオーラが漏れていたということに。

仁「代わって。」

さ「はあ？」

仁「そこは、私の場所です。」

恭「…。」

恭介は何も言えなかった。仁美の顔が憎悪に満ち溢れていたからだ。

さ「なに訳わかんないこと言ってるのよ。どっか行つて。」

仁「上条君、今助けますわ。」

オオオツ！

どす黒いオーラが一気に膨れ上がった！

ほむ「志築さん！」

仁美の方へ駆け出した！

仁「アアアアツ!!」

パキツ!!ゴオオツ!!

さ「きやつ!」

恭「うわっ!」

ほむ「うっ!」

仁美が持っていたカプセルが割れ、仁美は中から飛び出した黒い何かに飲み込まれ、巨大化した!

その際の爆風によりさやかと恭介は通り道に吹き飛ばされ、ほむらは反対の壁に叩きつけられた。

「ウゝアゝアゝアッ!」

a p r i c o t

さ「何よ、これ…。でも、こんなのだっかで見えた気が…、うう!!」

唐突に頭痛が走った。あまりにも痛みのせいで、立つことができない。

巨大化により天井が突き破られ、崩れたコンクリートがさやかの上に落ちていく！

恭「さやか!!」

・  
・  
・

〔鹿目邸〕

ま「今日は何しようかなあ。」

受験勉強は視野に入っていないようだ。昼はどうに過ぎている。

知「まどか、大変だ!」

ま「どうしたの?」

一階から父の声が聞こえた。



知「テレビを見てくれ。とんでもないことになってる！」

降りてテレビを見た。テレビ画面には破壊されたデパートの入り口が映っているではないか。

ま「これって、嘘、まさか！」

知「何か知ってるのかい？」

ま「わかんないけど、何とかしてくれる人なら知ってる。」

知「軍ならもう向かってるよ。」

ま「いや、そうじゃなくて。」

ニュース「速報です！昨夜午後8時頃に現れた黒い物体が動き出しました。」

ま「え!？」

予想が外れた。デパートを襲撃したのは、その黒い物体だと思っていたからだ。

ま「私、先輩の家に行ってくる！」

知「あつ！待ちなさい！」

一目散に走った。先輩とは勿論マミのことだ。

・・・

「エオンモール」

ほむ「…、いったい、どうなって。」

目を覚ますと、誰もいなかった。

頭を打って気を失っていたのだが、あの衝撃を思い出すと生きていることが奇跡に思う。

ほむ「誰か、居ないのかしら。」

立ち上がってさらに驚いた。埃で服は汚れているものの、外傷がないのだ。

ほむ「とにかくここを出ないと。」

その場を離れ、一階まで階段で降りた。

驚いた。電気が付いている店はどこにもなく、所々が荒らされているのだ。荒らすとは言ったものの、人がやる嫌がらせのレベルではなく、商品や壁が破壊されているレベルのものだ。

ほむ「あれは…!」

???「うえ〜ん!」

20m先に一人の少女が転んでいた。取り残されたのだろうか？

ほむ「待ってて。…っ!」

ゴゴゴツ!

3階の渡り廊下が崩れ落ちた！

ほむ「間に合って！」

ギョーンツ!!

あの子を助けたい。その思いだけを胸に全力で走った。

ドォーンツ!!

なんと！少女を抱え無傷で助け出したのだった！

ほむ「!!（ほんの一瞬しかなかったはず。どうして間に合ったの?）」

本人が一番ビツクリしていた。

? 「ありがとうございます。」

ほむ「礼には及ばないわ。」

？「私を買ったチーズまで助けてくれて、感激なのです。」

ほむ「貴女にとって必要だと思ったからよ。」

？「そうなのです。これは、お母さんへのプレゼントなのです。」

ほむ「一人で来ていたのね。」

一人でいられたわけだ。

ほむ「貴女、もしかして名前はへなぎさ〜だったりするかしら？」

な「すごいです！百江 なぎさっていうのです！」

直感が当たった。

ほむ「そう。百江 なぎさっていうのね。…うっ！」

な「どうしたのですか？」

又しても頭痛が襲った。立って居られない程だ。

ほむ「(さっきの衝撃のせいかしら？意識が…)」  
な「しつかりするのです！」

ほむらはまた気を失ってしまった。

・  
・  
・

「マミマンション」

ま「マミさん！」

巴「鹿目さん？ノックくらいはして欲しいんだけど…。」

ま「マリアちゃん居ませんか？」

巴「そう言えば昨日から帰って来てないわね。どこに行ったのかしら。」  
ま「そんな…。」

昨日から一度も帰って来ていないということは、まさか！

巴「な、なに、あれ…。」

窓の外を指差した。ビル街で黒い生物が暴れていたからだ。しかも、その近くでは着物を着た巨人までいるではないか。

ま「怪魔が、2体も。軍人さんでも、敵わなかったの？嫌だよ、そんなの嫌だ…。」

巴「落ち着いて。まずは武呂さんを探すことが先決よ。」

ま「…わかりました。でも私、心当たりがあるんです。」

巴「ジムには居なかったわよ。」

ま「違うんです。居たら嫌だけど、マリアちゃんはたぶんそこに居ます。」

巴「わかったわ。それなら私は風見野の方へ行くわ。」

黒い怪魔が風見野市に向かって移動していたからである。

ま「お願いします。」

巴「それじゃあ、後でね。」

マンションを出て、二手に分かれ走った。

・・・

〔廃墟〕

まどかのペースは落ちていた。前日から慣れない運動をしてきたからだ。辺りは暗くなってきた。

ま「そんな、廃墟が崩れてる。こんなやつてないよ。」

昨日まであった廃墟は無くなっていた。あったのは瓦礫の山だ。

ま「マリアちゃん！どこなのー！」



返事はない。瓦礫の中を探すことにした。

ま「マリアちゃん！重い…。」

退ける物だけは退けるようにした。

ま「マリアちゃん！痛っ！」

何度か手を切ったりもしたが、諦めなかった。

そして遂に、

ま「っ！そんな、嘘だよ…。」

乾いた血の付いた腕が見えた。胴体は、手では退けられない残骸に埋もれている。

ま「うわあああん！マリアちゃん！」

怪魔と闘える人物を失ったということよりも、一人の友達が死んでしまったことを悲しんだ。

大声で泣いてもマリアは応えなかった。

ま「ぐすつ、マリアちゃん…。」

冷たくなつたマリアの手を握つた。

すると、あの滴が水面に落ちたような音が聞こえ、

ま「この音って。えっ?」

まどかは未知の力に吸い寄せられた!

ま「私、どうなつちやうのかな。」

「もしかして、マリアちゃんが、置いて行つた私を恨んで、引きずり込もうとしてるのかな…。」

ここまで不思議なことばかり起こると、おかしくなってしまうのも無理はない。しかし、たどり着いた場所は地獄ではなく、一面の花畑であった。

ま「ここ、どっかで見たような。」

？「やつと会えたね。貴方には、たくさん話さなきやいけないことがあるから。」

空から何者かが舞い降りた。白と桃色のドレスを身に着け、瞳は金色である。

「私、鹿目まどか。」

第8話へ続く。

# 第8話「この世界は、わたしが救う…!」

## ● 怪魔データ ●

?? ジェラシーの怪魔 アプリコット

・ その性質は嫉妬。

・ ある男の子に恋をした少女が、その男が別の女性から大事にされていないことを知り、憤怒すること誕生。

・ 弓術や合気道といった多彩な才能を持つ。

・ この怪魔に打撃はあまり効かないため、よく接近してくる中飛び道具で闘わなければならぬ。

・ この怪魔を倒したければ、怪魔が望む人間を生贄に差し出すか、容赦ない攻撃を連続で与えるしかない。

くまだ誰も知らない物語く 第8話

???

ま「え、ええ！わたし!」

待つていたのは、まさしく自分だった。

神々しいオーラと、一目で女神と伺える衣装を身に纏っており、とても自分とは思えないが、名前も声も背丈も同じなのだ。

ア「うん。会えて嬉しいよ。本当はわたしが引き寄せたんだけどね。」

ま「ど、どうして?」

ア「わたしがそっちの世界に行ったら、世界が壊れちゃうから。」

ま「わけわかんない…。」

ア「ここに座つて。いろいろ話さなきゃいけないから。」

言われるがままに座つた。

ま「でも、早く何とかしないと、見滝原が…。」

ア「大丈夫だよ。向こうの時間は流れていないから。」

ま「そうなんだ。ねえ、もう一人の私は、どうしてそんな姿なの?」

ア「いろいろあってね。今は魔法少女を救う存在になったの。」

ま「じゃあ、マリアちゃんのことも？」

ア「それは、できないみたい。マリアちゃんがいる世界も入れないから。」

他にもわけがあるようだ。

ま「そんな…。」

ア「だから、貴女に見滝原を救ってほしいの。」

ま「そんなこと言われても、私はマリアちゃんみたいに闘えないよ。」

ア「じつとしてね。」

アルティメットまどかは、まどかの額に指をそつと当てた。

ま「っ!!」

途端、まどかの頭の中を走馬灯のように記憶が流れた。

どの世界でも、家族に愛されていたということ。  
本来さやかとは親友だったということ。

どの世界でも、ママは頼れる先輩だったということ。

転校生のほむらとも親友だったということ。

時には杏子とよく話していたということ。

ある世界ではそれらのみんなと共に魔女と闘ったこと。

そして、どの世界でも、自分は誰かの役に立ちたいと願っていたということ。

それらの閉ざされた記憶の扉が開いた！

ま「な、なんで、忘れてたんだろう…。」

まどかの目から、滝のように涙が溢れていた。

ア「無理もないよ。今見せたのは、別の世界での貴女の記憶なんだし。」

ま「でも、間違いなくわたしの記憶。」

ア「そう。貴女がいる世界はね、実は創られた世界なの。」

ま「創られた世界？」

ア「数えきれないほどのわたしが居た世界の一つなの。しかも創られ方が特別なんだよ。」

ま「じゃあもしかして、ほむらちゃんが冷たい態度なのって。」

ア「記憶を操作されて創られたほむらちゃんだからなの。」

ま「それなら、ほむらちゃんも思い出してくれたら。」

ア「それは、無理だと思う。」

ま「どうして？」

ア「貴女はわたしが記憶を蘇らせたことで思い出すことができたの。」

「わたしが関われない他のみんなは無理だと思う。」

ま「それなら、他のみんなもわたしみたいに連れてきてよ。」

ア「貴女をここへ呼べたのは、マリアちゃんのおかげだよ。」

「貴女とマリアちゃんは、触れると時空に穴を開けてしまうの。」

ま「じゃあ、みんなを集めてもう一度マリアちゃんを触ることは…」

ア「時間が足りないよ。」

ま「うう。」

ア「でも、沢山の記憶が重なった今の貴女なら、あの世界を救えるよ。」



「戦って、くれるよね？」

ま「…うん。私は戦う。」

「友達を、家族を、見滝原のみんなを守るために…！」

アルティメットまどかがニッコリ微笑むと、滴が水面に落ちたような音が聞こえた。気がつくのと、瓦礫の横に立っていた。

ま「怪魔が、暴れてる。」

ここからでも、怪魔が見滝原で暴れているのはわかる。

「この世界は、私が救う…！」

すーっと、まどかの全身が光った。

目を瞑ると、胸の中心から記憶にはないほどの強い光が放たれたソウルジェムが出現した。

それを手に取り、

ま「っ!」

カアツ!!

変身した…!

その姿は、「全ての宇宙、過去と未来の全ての魔女を、この手で生まれる前に消し去る」という願いを叶えた時の姿と同じであった。アルティメット化はしなかった。

ま「…。」

先程までは退けられなかった瓦礫を、今度はいとも簡単に手で退けた。そして、マリアの遺体を抱え、野に仰向けで寝かせた。

ま「待っててね、マリアちゃん。必ず勝つから。」

バシユツ!!

冷たいマリアの手を握った後、目覚めたまどかは勢いよく走り出した。

実はこの時、マリアの指がピクリと動いたことにまどかは気づかなかった。

...

〔見滝原ビル街〕

忠「さあ、もう一度いきますよ。」

ガ「グウン」

ドルルルツ!!

黒い怪魔が、身体中から機関銃を大放出した。

その攻撃により、見滝原と見滝原に近かった風見野のビル街が少しずつ破壊された。既に複数回この攻撃を行ったため、半径1km以内のビルはボロボロだった。

忠「アハハ！いいですよガトリンガ。」

g a t t l i n g a

ガ「グウオオオオ！」

この怪魔の名前はガトリンガ。全長20mの二足歩行で、身体中に銃口が生えてい  
る。

人も建物も粉微塵に帰す中、生存者が現れた。

杏「どういふことだオイ…。」

忠「おや？アレは。」

崩れたビルの残骸の上に立っていると、よく知っている人影が見えてきた。

杏「お前か？街をぶっ壊したのは。」

忠「ワタクシというより、ワタクシお気に入り、ワタクシお気に入りの怪魔ガトリンガですねえ。」

杏「許さない。お前達は絶対許さない！」

忠「…！」

誠は構えた。

忠「…あ、そうでしたね。ここでのアナタはか弱い女の子。」

杏「ウゼエ。」

忠「邪魔であることは変わらないので、ここで死んでください。」

杏「(どうしてこんな所に来ちまったんだろうな。何もできないのに、ニュースでこいつを見てたら居ても立つても居られなくなっちゃった。)」

巴「貴女達！そこに怪魔がいるから危ないわよー！」

風見野に向かっていたマミが到着した。

忠「何を仰いますか巴马ミさん。」

巴「どうして私の名前を。」

忠「この怪魔を出現させたのはワタクシですよ。」

巴「なんてことを…。」

杏「アンタ、なんでこんな所に来ちまったんだよ。」

巴「鹿目さんと手分けして武呂さんを探しているの。」

「ところで貴女、何処かで会ったかしら？」

杏「いや、ないはずなんだけど、会った気がする…。」

巴「奇遇ね。私もよ。」

忠「お喋りはそこまでです。バママさんも来たことなので、2人とも死んでもらいます。」

ガ「グウオオオ！」

魔法少女などではない2人が殺されようとした、その時！

ビッ!!

忠「！」

ドカーンッ!!

ガ「？」

突然一本の桃色の矢が、誠目掛けて飛んできた。誠は瞬時に躲した。

忠「誰ですか!?!」

やってきたのは勿論、眩い光を放つ魔法少女まどかだ。

巴「か、鹿目さん!?!」

杏「まどか?」

ま「مامィさん、杏子ちゃん、無事でよかった。」

忠「何故です…、何故、鹿目まどかが目覚めているのです!?!」

ま「貴女は、私が倒す…!」

「はっ!!」

ドオオオツ!!

忠「うっ!」

ガ「グウオオオツ!」

右手からとてつもなく強い衝撃波を放ち、誠とガトリングをもう一体の怪魔の近くまで吹き飛ばした!

ま「مامィさん、杏子ちゃんを連れて避難してください。」

巴「わ、わかったわ。」

ま「ありがとうございます。」

笑顔でそう言うと、

バシユツ!!

吹き飛ばした敵を飛んで追いかけた。

本当の自分に気づかされたまどかは、魔法少女に加え怪魔2体を相手に勝利することができのだろうか？

第9話へ、続く!!



## 第9話 「全ては陛下のためです」

### ●魔法少女データ●

??鹿目 まどか（ハイパーまどか）

・ 光の矢を放つ弓を操り闘う魔法少女。

・ 友達想いで家族思いの心優しい性格。

・ 心優しく、芯が強いため、遠慮がちになりながらも自分の思う所は相手にはつきりと伝えようとする。

・ 願いはその世界線において様々である。「交通事故に遭った黒猫エイミーを助ける」「家族の幸せを願って」「ワルプルギスの夜に苦戦するほむらを助ける」「さやかを元の人間に戻す」、そして「全ての宇宙、過去と未来の全ての魔女を、この手で生まれる前に消し去る」である。

・ 本作における彼女は、原作とは全く別の人物であり、「創られた世界」の人物である。アルティメットまどかが記憶を見せるまで、自分が何者だったのかを思い出せなかったのがその証拠だ。

・ 記憶を取り戻し、願い無しで因果を繋いだまどかは、最後の願いを叶えた時と同じ

力を宿し、再び最強の魔法少女として蘇った！

・ハイパーまどかとは、魔法少女鹿目まどかの究極形態のこと。

・アルティメットまどか曰く、ここは「創られた世界」である。誰に創られたのか、いつ創られたのかは知っているようだがまどかに教えなかった。そのうちわかるといいのだが…。

くまだ誰も知らない物語く 第9話

〔病院〕

とある病室では、さやかではなく恭介がベッドに横たわっていた。

さ「なんで、あたしなんかを助けたのよ…！」

しかし、その泣き言は彼に届かなかった。

看護師「失礼します。」

恭介が寝込む病室に、看護師は新たな患者を運んできた。

さ「え？ 暁美さん？」

その患者はほむらだった。特に外傷はないようだが。

ほむ「あら、美樹さやか。」

さ「え？ あんた、そんな呼び方してたっけ？」

ほむ「…あらごめんなさい。美樹さんは無事だったのね。」

何気なくさやかを呼んだら、何故か「美樹さやか」になった。

さ「恭介が助けてくれたから。あんたこそ、あんまり怪我してないね。」

ほむ「それは私もよくわからないわ。」

その時、つけていたテレビに速報が入った。

アナウンサー「速報です。既に避難が完了した見滝原市中央区画に、突如巨大怪物が引き返してきました。中継です。」

映像が切り替わったそこには、電気が付いてないボロボロのビル街にジェラシーの怪魔アプリコットと、乱射兵器の怪魔ガトリングが映っていた。空撮のようだ。

アナウンサーが言っていることとは違い、ガトリングは引き返したと言うよりは吹っ飛ばされたかのようにだった。

さ「あそこ、誰かいる。」

ビルの屋上には微かに2人の人が立っているように見えた。

ほむ「！ まどか！」

さ「？ 暁美さん？」

ほむらは何故か居ても立ってもいられなくなった。

ダツ!!

看「ちよ、ちよつと！患者さん！」

ベッドから飛び起き、走り去ってしまった。

さ「暁美さん、どうしちゃったんだろう。」

・・・

〔見滝原ビル街〕

巴「さあ、避難するわよ。」

杏「ちよつと待て。」

巴「何かしら。」

杏子は何か言いたげであるが、本人がそれを言えないでいる。

巴「何を言いたいかはわかるわ。あれと闘いたいんでしよう？」

杏「…ああ。」

巴「あの姿の鹿目さんを見てはつきりわかったわ。私も逃げるより立ち向かう方が自分に合ってるって。闘い方なんてわからないのにね。」

杏「アタシは元々逃げたりしないけどよ、もう一回まどかを見ればそれも思い出せる気がしてさ。」

「なんか、あのまどかを初めて見た気がしないんだ。」

巴「やっぱり？」

杏「ママもそうか。」

巴「佐倉さん、今私のことを…！」

杏「ママこそ今アタシのことを。」

2人の記憶の一部が、魔法少女として蘇ったまどかの影響を受け、繋がった！

杏「行こうぜ。」

巴「ええ。」

見滝原へ駆け出した！

•••

〔見滝原中央区画〕

ま「…。」

忠「自己紹介がまだでしたね。」

「初めまして、ワタクシは魔法少女忠岡 誠と申します。」

ま「わたし、鹿目まどか。軍人さんはどうしたの？」

忠「全滅させました。」

ま「…こんなこと、今すぐやめて。」

忠「そう言うわけにはいきません。」

ま「どうしてこんな酷いことするの？」

忠「全ては陛下のためです。そのためなら多少の犠牲はやむを得ません。」

ま「そんなこと、わたしが許さない。」

忠「ならどうしますか？ワタクシを殺してでも止めますか？」

ま「殺したりしないよ。：倒すだけだから。」

弓を構えた。

忠「アハハ！流石は最強の魔法少女。」

「アナタを倒せばワタクシは陛下の一番になれる。」

ま「陛下って誰なの？」

忠「ガトリング!!アプリコット!!」

バツ!!

誠の背後にガトリングが現れ、誠は飛んでガトリングの肩に乗った。

2体の怪物はまどかに両手を向けた。

ガ「グウオオオッ！」

ア「ア、ア、ア！」



忠「鹿目まどかさん、ここで死になさい！」  
ドルルルツ!!ボボボボツ!!

ガトリングの両の手のひらから一斉に発射されたマシンガンと、アプリコットから放たれた光弾はビルを破壊した。

しかし、そこにまどかの残骸はなかった。

忠「よく避けられましたね。ですが、そう遠くへは行っていないはず。」

「お前たち、探しなさい。」

ま「うん、遠くには行っていないよ。」

忠「ナニっ!」

怪魔に命令を下した直後、背後から声が聞こえた。

なんとまどかは、2体の怪魔と魔法少女の目をかいくぐり、ガトリングの背後のビルの屋上に立っていたのだ!

ま;「ホーミングアロー」

ビビッ!!ザクッ!!

忠「ぐあっ!」

振り向いた直後、腹を射抜かれガトリンガから落ちた。

ガ「! グウオオオッ!」

ドルルッ!!

怒ったガトリンガはすかさずマシンガンを連射したが、まどかが背後に飛んで避けたため当たらなかった。

ガ「グウンッ!」

ドンッ!!ドンッ!!

忠「ま、待ちなさい!」

自慢の紐を操り見事に着地した誠が叫んだが、遅かった。

怒り狂ったガトリンガはまどかを必死に追いかけた。

ま「……っ！」

バツ!!

何を目印にしたのか、まどかは上空へ跳び上がった。

ガトリンガはまどかの下に入り、腕を上に向けマシンガンを発射した。

ガ「グウオツ！」

ドルルルツ!!

それと同時に、まどかは急降下しながら、

ま；「ハイパー・フラワー・イン・ブルーム」

ま「はあっ！」

ズビビビツ!!

空に巨大な紋章が現れ、本人やその紋章から無数の矢を放った！

ガトリングの弾は全てかき消され、

ピッ!!

ガ「ガッ!!」

最後の大きな矢がガトリングを射抜いた!

ま「…ごめんね。」

ドッカーンッ!!

ガトリングは大破した。

ア「ウゝウゝ。」

ま「次は貴方ね。」

アプリコットは近づいてきていた。

忠「まさか、ワタクシのガトリングが…。」

ま「降参してよ。」

忠「そうはいきません。」

ま「じゃあ、この怪魔も倒す！」

怪物を見上げてそう言った。

忠「いいのですか？その怪魔はアナタの親友志築仁美さんですよ？」

ま「…うそ。」

忠「本当ですよ。よくご覧ください。」

ま「…!!」

忠「アプリコット、今ですよ！」

ア「ア、ア、ア、ッ！」

手から生み出した光の刀を振り下ろした。

ま「！」

ドゴオツ!!

なんとか躲したが、

忠「おっと。」

シユルルツ!!ギユツ!!

ま「うっ!」

誠に右腕を紐で掴まれた!

忠「さあアプリコット、早く攻撃するのです!ワタクシも、長くは、持ちませんからあ  
!」

引つ張るまどかのとてつもない力に誠が負けかけている。

ま「仁美ちゃん!目を覚まして!」

ア「ウゝウゝウゝ。」

ま「それっ！」

忠「ぐっ！」

誠を上空へ放り投げた。そして、光の矢を放った。

ビビッ!!

ア「ッ！」

しかし、空中の誠を庇い、まどかに背を向けた。

ま「っ！」

慌てて矢を外した。

忠「さあどうしますか？このままでは消耗するアナタは負けますよ？」  
ま「…。」

どうするまどか!?

第10話へ、続く!



# 第10話 「もう一度、魔法少女に……！」

## ● 怪魔データ ●

?? 乱射兵器の怪魔 ガトリンガ

・ その性質は殲滅。

・ 幾度となく生物兵器の実験が行われ、その末に誕生した怪魔。

・ 身体に至る所に銃口が生えており、視界以外は感覚で撃ちまくっている。しかし、口径は対人サイズ以外にも様々であり、もし同じサイズの敵を相手にしても苦はないだろう。

・ この怪魔に遠距離攻撃はあまり効かない。自分の弾でかき消してしまうからだ。

・ 戦績は輝かしく、累計で100人の魔法少女を倒した。

・ この怪魔を倒したければ、これを超える殲滅力を持って闘うしかないだろう。尤（もつと）も、その力を持っていればの話である。

くまだ誰も知らない物語く 第10話

〔見滝原中央区画〕

アプリコットに攻撃できないまどかの闘いは、泥沼化していた。

まどかの攻撃はどちらに向けようが外すことになり、対する誠もまどかにダメージを与えられない。アプリコットの攻撃も、全て避けられている。

ま「仁美ちゃん！目を覚まして！」

忠「無駄ですって。」

忠；「マジックロープ」

忠「ハアッ！」

ドゴツ!! シュルルツ!!

両手を地面に叩きつけると、地面の至るところから太い紐が飛び出してきた!

ま「きゃっ！」

ギユツ!!

複数の紐を払いきれず、四肢に巻き付かれ、宙に吊るされた。

忠「今です！」

ア；「デモンズアロー」

ア「ア、ア、ア、ッ！」

ビビッ!!

まどか目掛けて矢が放たれたが、

ま「う…、ええいつ！」

ブチイッ!!

魔力を全身から解放し、紐を焼き切り躲した。

忠「！ 何という魔力…！」

ま「はあ…はあ…。」

忠「だけど、もう長くはないようですね。」

ま「まだだよ。見滝原は、わたしが救うから！」

・  
・  
・

戦場にいち早く駆けつけたのは、

ほむ「…。」

ほむらだった。

ほむ「あれは、間違いなくまどか。…まどか?」

今になって、自分が彼女を鹿目まどかではなくまどかと呼んでいることに気づいた。

ほむ「うっ!うう!!」

頭痛が走った。

周りに人は居ないため、心配する者は無い。そのせいで、ほむらは飛んでくる瓦礫に気づけなかった！

ドゴツ!!

ほむ「！」

瓦礫が当たると直前、まどかがほむらの前に立ち、瓦礫を破壊した。

ま「もう大丈夫だよ、ほむらちゃん。」

ほむ「なんで私なんかを助けるの？今まで酷いことばかり言ってきたのに。」

ま「だってほむらちゃんは、わたしの、最高の友達だもん。」

ほむ「!!」

ニツコリ笑い、再び怪魔に向かって跳んでいった。

ほむ「づづづづづづっ!!」

パキツ!!

最高の友達、その言葉が頭に入り、今まで以上の頭痛が走った途端、ほむらの何かが壊れた。

そして、その亀裂に入り込んでくるかのように、失くした記憶が一度に押し寄せた。

右も左もわからなかった自分を助けてくれたのは、まどかであったこと。

まどかを救う自分になるために魔法少女になったこと。

まどかのためだけに強くなろうとした毎日を送っていたこと。

たった一人でも闘い続けたこと。

悪魔に身を墮とし、女神を引き裂いたこと。

ママは頼れる先輩だったということ。

時には杏子とよく話していたということ。

ある世界では、まどか、ママ、さやか、杏子の5人で魔女と闘ったこと。

どの世界でも、まどかに愛されていたということ。

そして、どの世界でも、まどかだけでも救われてほしいと願っていたということ。

それらの閉ざされた一つ一つの記憶が、流れ星のように頭に流れ込んだ！

ほむ「あ…。」

自分でも気づかなかったが、滝のように涙が溢れていた。

ほむ「なんで、私…。」

既に涙は大量に流したのだが、また泣きたくなかった。

しかし、それをぐつと堪え、

ほむ「待っていてまどか。今、私も向かうわ…！」

闘う覚悟を決めた！

途端、すーっと全身が光り、胸からソウルジェムが現れた。今までにない輝きだ。これなら、闘える！

ほむ「もう一度、魔法少女に…!」

宙に浮くソウルジエムを勢いよく掴み、

ほむ「っ!!」

カアツ!!

変身した!!

当人は悪魔化を少し懸念したが、姿は魔法少女だった。

違うところと言えば、盾を付けているのに矢を出すこともできるといふこと。そして、自分から滲み出ているオーラは、まどかが究極の魔法少女になった時のものになっているというところである。色は紫である。

忠「なんですか、今の光は…!」

ア「ヴ?」

ま「? なに?」



忠「あれは…。」

誠が視認できた時には、とうに攻撃の構えができていた。

ほむ；「AT-4ロケットランチャー HOMURA」

バシユウウツ!!

忠「ナニっ！」

ア「ウッウッ！」

ドカーンツ!!

アプリコットが誠を庇った。

忠「まさか、曉美ほむらが」

ドガツ!!

忠「がっ！」

喋っている途中で、ほむらが誠の頬に重い蹴りを入れた！蹴り飛ばされた誠はビルに

叩きつけられた。

ま「ほ、ほむらちゃん!？」

ほむ「待たせたわね、まどか。」

ま「で、でも、どうやって?」

ほむ「その話は後。まだ聞える?」

ま「な、なんとか。」

ほむ「流石まどかね。」

ア「ウッ、ウッ、ウッ」

ほむ「この化け物は私が相手をするわ。あの魔法少女をお願い。」

ま「待ってほむらちゃん。その怪魔は仁美ちゃんなんだよ。」

ほむ「…わかってるわ。だからこそ、私が倒す。」

忠「おのれ、暁美ほむらア！」

遂に、ほむらは本当の自分を思い出し、魔法少女に復活した。

仁美が変身している怪魔アプリコットを倒すことができるだろうか?

・  
・  
・

杏「やつと着いたな。」

巴「ええ。」

2人も到着した。

巴「1人増えてるわね。」

杏「あの紫のオーラの魔法少女が誰かわかるか？」

巴「ええ、暁美さんね。」

杏「やっぱりほむらか。」

巴「どうしてわかったの？あの子とは違う中学のはずよ。」

杏「何となくだよ。مامιだってそうだろう？」

巴「まあね。あまり会ったことないけど、何故かはつきりわかるの。」

杏「笑っちゃうよな。あんな化け物とまともにやりあえるなんて。」

「もっと可笑しいのがさ、アタシ達もそうだった気がするってこと。」

巴「間違いないかもしれないわよ。」

「でも、今は見守っていきましょうか。」

杏「ああ。」

少し離れた場所で見物することにした。

•  
•  
•

ほむ；「超強化時限爆弾」

高く跳び、アプリコットの頭上に投げ込んだ。

ア「アゝ！」

ドカーンッ!!

ほむ「これでは倒せないわね。」

効いてはいるが、倒すまでには程遠かった。

ほむ「本気でやるしかない…！」

ほむ；「RPG—7 HOMURA」

バシユウウツ!!

ア「ウッ！」

ア；「デモンズアロー」

ビビツ!!ドカーンツ!!

相殺された。

しかし、このたった一瞬がほむらには十分すぎた。

ほむ；「トマホーク HOMURA×18」

ドゴオツ!!ドゴオツ!!ドゴオツ!!

巨体故に全て命中した!

アプリコットは大きく吹っ飛び、仰向けに倒れた。

ア「ア、ア、ア…」

ほむ「…」

アプリコットの上を跳んだ、いや、飛んだ。

ほむ「貴女は、私が葬る。」

ほむ「デビル・バースト」

浮いたまま左腕で光の弓を作り、右手で引いた!

ビリイイイツ!!

ア「ア、ア、ア、ア! !」

ドツカーンツ!!

アプリコットは大破した。

ほむ「…ごめんなさい、志築さん。」

少しの時間だったが、共に尾行をした仲である仁美を倒すのは複雑だった。しかし、まどかにやらせるのはもつと辛かった。

ほむ「浮いてるわね。気づかなかったわ。」

今なお宙を舞っていた。

一方。

ま；「スターライトアロー」

ザクツ!!

忠「ガハっ！」

ゴツ!

体力が減っているとは言え、まどかの勝利は揺るがなかった。誠は撃ち落とされ地面に激突した。

ほむ「まどか、怪我はない?」

ま「大丈夫だよ、ほむらちゃん。ほむらちゃんも勝ったんだね。その、ごめんね…。」

ほむ「私が倒すと決めたのよ。」

ま「そうだけど。」

ほむ「私の魔力を少し分けてあげるわ。」

まどかに魔力を分け与えた。そんなこともできるようだ。

ほむ「これで、万が一にも貴女は死なないわ。」

ま「ほむらちゃん。」

忠「な、何なんですかこれは! どうして、どうして伝説上の魔法少女が2人もいるんですか!」

ま「わざわざ殺したりしないよ。だから、もう諦めて。」



忠 「まだです。」

ほむ 「何か言ったかしら？」

忠 「まだ終わりじゃありません。」

「こうなれば、この身を犠牲にしても……！」

ポケットに入れていた2つの怪魔カプセルを取り出した。マリアから奪ったメタルドンとケベフセヌエフのカプセルだ。

ほむ 「それは……！」

仁美を呑み込んだカプセルにそっくりだ。

誠はカプセルのスイッチを押しながら、

パキツ!!ゴオオツ!!

カプセルを壊した。すると、中から溢れた瘴気が誠を呑み込んだ！

ま「な、なに!？」

ほむ「まどか! 離れて！」

2人は距離をとった。

暫く様子を見てみると、瘴気から全長30mの、二足歩行の化け物が現れた! 胸部に誠が埋まっている。

忠「アハハハハッ!! 2体の怪魔を取り込みマシタ。」

「サアサア、抗ってみてくださいヨオ！」

まどかとほむらは構えた。

ほむ「行くわよ、まどか。」

ま「うん。」

「見滝原は、貴女なんかに壊させない…!!」

第11話へ、続く…!!

# 第11話 「誰もが、魔法少女の勝利を信じてる」

## ●魔法少女データ●

?? 曉美 ほむら（ハイパーほむら）

・銃火器や軍事兵器を操り闘う魔法少女。

・容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能。クールな性格。しかし、人を寄せ付けない雰囲気纏っている。

・願いは、「鹿目さんとの出会いをやり直したい。彼女に守られる私じゃなくて、彼女を守る私になりたい」である。

・本作における彼女は、原作とは全く別の人物であり、「創られた世界」の人物である。まどかから「だつてほむらちゃんは、私の、最高の友達だもん。」と言われるまで、自分が何者だったのかを思い出せなかつたのがその証拠だ。

・記憶を取り戻し、願い無しで因果を繋いだほむらは、最後の願いを叶えたまどかと同じ力を宿し、究極の魔法少女として蘇った！

・ハイパーほむらとは、魔法少女曉美ほむらの究極形態のこと。

・いつの間にか魔力を分け与える方法を理解しており、魔力が減少したまどかを助け

たのであった。

くまだ誰も知らない物語く 第11話

「見滝原中央区画」

ま；「スプレットアロー」

ま「えい！」

ビツ!!ビツ!!ビツ!!

怪魔と化した誠に連続攻撃した。

ダメージを与えたかのように見えたが、

忠「痛くナアイ！」

ゴキツ、ゴキツ

攻撃された部位が硬質化した。

ま「そんな…。」

ほむ「中途半端な攻撃は無駄みたいね。」

「それなら…。」

ゴゴゴ

地面から巨大な3連装砲塔が現れた。

ほむ；「46センチ砲 HOMURA」

ほむ「耳を塞ぎなさい！」

ま「！」

ドオオオンツ!!

ゴオオオンツ!!

砲弾は、巨大な怪魔に全て命中した！

ほむ「これで、どうかしら？」

忠「アケミホムラアア！」

絶命していなかった。しかし、ダメージは大きなもので、再生がやつとのようだ。

ほむ「無駄よ。まだ撃てるから。」

ドオオオンツ!!

忠「ツ！」

直前で何とか躲した。

忠「当てられなければ、何ともナイ！」

ほむ「はあ…、はあ…、まだよ…！」

ま「ほむらちゃん！」

まどかは攻撃出来なかった。ほむらのように強い魔法を使う余裕がなく、かと言って強くない魔法を使えばさらに敵を硬くしてしまうからだ。

勝てるかほむら!?

•  
•  
•

杏「あの化け物、なんてデケえんだ！」

巴「でも、魔法少女は負けないわ。負けるもんですか。」

杏「そうは言ってもよお。」

女の子「頑張れー！お姉ちゃんたちー！」

巴&杏「!？」

気がつくくと、小さな女の子がすぐ側に居た。

杏「オイ、さっさと逃げろ。」

女の子「嫌だ！お姉ちゃんたちを応援するの！」

杏「はあ？何言って」

男「頑張れ！化け物なんかには負けるなー！」

人々「頑張れー！」

巴「これは…。」

建物に隠れていた住人、さらに避難していた人々が戦場ギリギリまで近づき声援を送った。

杏「正気かテメエら。何を根拠に。」

巴「…誰もが、魔法少女の勝利を信じてる…。」

杏「へっ、なんでかな、くすぐってえな。」

巴「魔法少女である自覚が芽生えた、とか？」

杏「そ、そんなわけねえよ！」

巴「！ 危ない！」

ヒユウウウウ

ほむらが放った内の1発の砲弾が上から飛んできた！

女の子「うわあ！」

杏「テメっ！」



ゴオオンツ!!

巴「そんな、佐倉さん……!」

母「! うちの子が……!」

だが!

杏「危ねえって言っただろ。」

女の子「お姉ちゃん……」

埃が晴れると、女の子のすぐ頭上で砲弾を生身で受け止めていた杏子の姿が現れた。

杏「よつと。」

砲弾を捨てると、砲弾はパツと消えた。

巴「佐倉さん、今のつて。」

杏「今ので確信を持てた。行くぞ、マミ。」

巴「…ええ。」

女の子「お姉ちゃん、ありがとう！」

母「うちの子を助けてくれてありがとうございます！」

杏「れ、礼なんていらねえし！」

「つたくもう、調子狂うよな、ホント。」

女の子「お姉ちゃん、お姉ちゃんつてもしかして。」

杏「さあな。他の奴には言うなよ。」

女の子「う、うん。」

巴「行くわよ！」

杏「おう！」

バシユツ

跳んで向かった。

•  
•  
•

「病院」

さ「何？何なの？」

恭介の病室でテレビをずっと観ていたさやかは、まどかやほむらの戦いを理解出来なかった。

アナ「信じられない光景です！突如現れた巨大生物になんと女の子2人が戦っております！」

さ「それさつきも言っていなかった？」

アナ「これは、子供向け番組に存在する魔法少女とでも言うのでしょうか？いえ、この映像からわかるその姿は魔法少女ではなくもはや魔女とでも言うべきでしょう！」

さ「あ、頭が、痛い……！」

さやかに頭痛が走った。〈魔法少女〉〈魔女〉、この言葉が何故か頭に引つかかる。

な「大丈夫なのですか？」

さ「あ、あんたは…。」

な「なぎさはなぎさなのです。思い出してくれたのですか？」

さ「思い出す？何を？」

な「ま、まだみたいなのです…。ほむらはもう思い出したのですよ。」

さ「ほむらが？つて、え？」

暁美さんと呼んでいた筈が、無意識にほむらになった。

な「そろそろママが着く頃なのです。」

さ「ママさんが？つて、あれ？」

ママという人物も初めて聞いた筈なのに、何故かわかった。

2人はテレビをじっと観た。

•  
•  
•

〔見滝原中央区画〕

マミと杏子は、怪魔の誠のすぐ側まで近づいた。

杏「まどか、ほむら、待たせたな。」

まどかとほむらの魔力の波動を受け、完全に記憶が蘇った。

優しかった父を助けるために魔法少女になったこと。

父が表で世界を救うなら、自分は裏で世界を救うんだと毎日闘っていたこと。

家族を失い、たった一人になっても闘い続けたこと。

自分のためだけに生きるつもりだったのに、殆どの世界では最期に誰かのために命を投げ打ったこと。

マミは頼れる先輩だったということ。

さやかともっと仲良くなりしたいと思っていたということ。

ある世界では、まどか、マミ、さやか、ほむらの5人で魔女と闘ったこと。

そして、どの世界でも、結局は正義の味方であったということ。

それらの閉ざされた一つ一つの記憶が結集し、強固な記憶となった！

巴「鹿目さん、暁美さん、もう大丈夫よ。」

まどかとほむらの魔力の波動を受け、完全に記憶が蘇った。

交通事故に遭い死にかけた時、まだ死にたくないと願って魔法少女になったこと。

ひとりぼっちでも、必死に生きようと戦っていたこと。

家族を失い、たった一人になっても闘い続けたこと。

まどかとさやかを魔法少女に勧誘してしまったことを悔やんでいたこと。

1人でも多くの魔法少女が救われて欲しいと切実に願っていたこと。

杏子はパートナーだったということ。

振り返れば、仲間が居たということ。

ある世界では、まどか、さやか、杏子、ほむらの5人で魔女と闘ったこと。

そして、どの世界でも、頼れる先輩であったということ。

それらの閉ざされた一つ一つの記憶が集合し、完璧な記憶となった！

巴「あら佐倉さん、泣いてるの？」

杏「ウルセエ！マミも泣いてるじゃんか！」

巴「ほんとね。ひとりぼっちじゃないって思ったら、我慢出来なくなっちゃった。」

泣き笑いした。

杏「その、悪かったよ。コンビ勝手に解散しちゃって。」

巴「いいのよ。さあ、行くわよ、佐倉さん！」

杏「今度はアタシらが守る番だ！」

途端、すーっと全身が光り、胸からソウルジェムが現れた。今までにない輝きだ。宙に浮くソウルジェムを勢いよく掴み、

巴&杏「っ!!」

カアツ!!

変身した!!

マミと杏子の身体から滲み出たオーラは、まどかが究極の魔法少女になった時のものになっていた。色は、それぞれ黄と赤である。

忠「アツ？」

ほむ「この光は…。」

ま「来てくれたんだね。マミさん、杏子ちゃん…!」

ギリギリだった。あと少し遅ければ、ほむらの魔力は尽きていた。

杏「あとはアタシらに任せな!」

巴「ゆっくり休んでちょうだい。」

ニツコリ笑うと、2人は誠に飛びかかった!



杏「こういう奴はな、足をすくつちまえばいいんだよ！」  
ギョツ!!ドオンツ!!

槍を鎖に変化させ、怪魔の片足に巻き付け、凄まじい力で引つ張り転倒させた!

巴「曉美さんのさっきの魔法は参考になったわ！」  
巴；「無限の魔弾」

数えきれないほどのマスケット銃が現れた。しかしよく見ると、

杏「あっ! マミ！」  
ドドドドドツ!!

普通のマスケット銃のサイズではなかった。  
街に大きなクレーターができてしまった。

杏「オイ、今の、ほむらと同じサイズの弾だっただろ。」  
巴「ごめんなさいね、張り切っちゃって。」

反省の色は窺えない。

ま「す、すごい。ママさんと杏子ちゃん…。」

ほむ「流石は、ベテラン魔法少女ね。」

ま「ほむらちゃん、無理しないで。」

杏「大丈夫か？2人とも。」

巴「やつつけたわよ。」

ま「ママさん、杏子ちゃん、ありがとう…！」

杏「へっ。」

ほむ「その、ありがとう…。」

巴「無事で何よりよ。」

和やかになったが、

忠「勝手にオワルナア！」

倒せていないようだ。

杏「しつこいなあコイツ。」

巴「何処からでもかかってらっしやい！」

忠「フンッ！」

巨体から2本の太い紐を放った。

いったい誠は、何をしようとしているのか？

第12話へ、続く!!

## 第12話「さようなら、恭介」

### ●魔法少女データー●

??巴 マミ（ハイパーマミ）

- ・ マスケット銃やりボンを操り闘う魔法少女。
- ・ 面倒見の良いお姉さんのような性格。しかし、独りは寂しいと考えている。
- ・ 願いは、「助けてほしい」である。

・ 本作における彼女は、原作とは全く別の人物であり、「創られた世界」の人物である。まどかやほむらの激闘を長く見物するまで、自分が何者だったのかを思い出せなかったのがその証拠だ。

・ 記憶を取り戻し、願い無しで因果を繋いだマミは、最後の願いを叶えたまどかと同じ力を宿し、究極の魔法少女として蘇った！

・ ハイパーマミとは、魔法少女巴マミの究極形態のこと。

・ 見様見真似でほむらの渾身の魔法を再現してしまうあたり、流石は天才魔法少女だと言うべきである。

??佐倉 杏子（ハイパー杏子）

・多関節の槍を操り闘う魔法少女。

・周囲の被害を鑑みない利己主義な性格、ではなく本当は情が深い性格の持ち主。

・願いは、「みんなが父の話を真面目に聞いてくれますように」である。

・本作における彼女は、原作とは全く別の人物であり、「創られた世界」の人物である。

まどかやほむらの激闘を長く見物し、小さな女の子を助けるために砲弾を防ぐまで、自分が何者だったのかを思い出せなかったのがその証拠だ。

・記憶を取り戻し、願い無しで因果を繋いだ杏子は、最後の願いを叶えたまどかと同じ力を宿し、究極の魔法少女として蘇った！

・ハイパー杏子とは、魔法少女佐倉杏子の究極形態のこと。

・堂々とお礼を言われると取り乱す、照れ屋な一面も窺えた。

くまだ誰も知らない物語く 第12話

〔病院〕

さ「あれつてもしかして、マミさん？」

な「そうなのです。どうやら間に合ったみたいなのです。」

マミと杏子が魔法少女として蘇り、到着した時の中継が映されていた。

さ「それにあれは杏子!…杏、子?うっ!」

再び頭痛が襲った。

な「もう少しなのです!思い出すのです!」

さ「うっ、ぐっ…。」

恭「さや、か。」

さ「え?」

恭介がさやかを呼んだ。しかし、それは寝言だった。

さ「恭介。なんで、恭介がこんな目に…。」

泣きながら手を取った。

その時だった！

さ「あ」

パキツ!!

さやかの方が壊れた。

そして、その亀裂に入り込んでくるかのように、失くした記憶が一度に押し寄せた。

愛している男の子の怪我を治すために魔法少女になったこと。

魔女と戦うだけでなく、大切な人を守るために毎日闘っていたこと。

失恋し、理解者が居なくなっても命の限り闘い続けたこと。

誰かのためだけに生きるつもりだったのに、殆どの世界では最期に自分を助けてほしいと密かに願っていたこと。

ママは頼れる先輩だったということ。

杏子ともっと仲良くなりたいたいと思っていたということ。

ある世界では、まどか、ママ、杏子、ほむらの5人で魔女と闘ったこと。

そして、どの世界でも、上条恭介を愛していたということ。

それらの閉ざされた一つ一つの記憶が結集し、鋼の記憶となった！

さ「あたし、何で…。」

涙が止まらなかった。尊い記憶をなくしていた衝撃の中でも、恭介と付き合えた記憶が少なかった。つまり、現在のこの環境は数少ない幸せな状況であり、当たり前ではなかったからだ。

な「やっと、思い出したのですね。」

さ「へへっ。グスっ、いやーまいったよねー。」

な「さやかはみんなの所に行くのです。病院はなぎさが守るから大丈夫なのです。」

さ「もうなぎさも変身できるっばいよね。おっけー。」

と、作り笑いをして会話してみた。

病室を出る前に恭介の手を握り、



さ「待ってて、すぐにあの化け物をやっつけてくるからね。」  
「さようなら、恭介。」

悲しみを振り払い、病室を扉から飛び出した。

・・・

〔見滝原中央区画〕

シュルルツ!!ギユツ!!

誠が何かを掴んだようだ。

シュルルツ!!

ま「? 今のつて。」

まどかは何かに気づいたようだ。

誠は伸ばした2本の紐を体内に取り込んだ。

ゴオオオ…バチバチツ!!…バチツ!!

巨体が黒煙に包まれたかと思うと、

杏「なんだありや!」

ま「こ、こんなのってないよ!」

ほむ「…」

巴「みんな、気をつけて!」

さらに大きく禍々しい怪魔が現れた!

身体に至る所が鉋物で覆われ、その割れ目全てから銃口が生え、腕2本、脚4本、高さ50m、横幅20m、天辺に誠が生えている、とんでもない怪魔だ!

忠「ウワアアッ！」

巴「なんて大きいの…！」

どうやら、アプリコットとガトリングのカプセルを取り込んだらしい。

ま「ほむらちゃん！」

シユウウ

まどかがほむらのソウルジエムに手をかざすと、

ほむ「これは？」

ま「これで、また魔法を使えるよ。」

ソウルジエムの濁りが浄化された。

ほむ「でも、まどかは？」

ま「わたしは、大丈夫。」

ほむ「なら、まどかは下がってて。」

忠「オマエタチハゼツタイカテナイ！」

杏「上等じゃん。かかって来いよ！」

忠「オマエタチノジャクテンハ、ソウルジエムノニゴリ。」

「ダカラ、タオスノハカンタンデス。」

ボオオツ!!

右手に火の玉を出現させた。

杏「そんなもん弾いてやる！」

しかし。

ボツ!!

杏「なっ！」

ほむ「あっ！」

それを背後に投げた。その先にあるのは、病院だ！

忠「アハハハ！モエテシマエ！」

ほむ「…駄目！」

時を止めることを考えたが、病院を動かすことはできない上、相殺させても病院はただでは済まない。

巴「間に合わないわ！」

ま「いやあ！」

だが。

カアツ!!

一同「!?」

病院が眩く光った！火の玉はかき消されている。

巴「あれは……!」

なんと、病院の屋上に魔法少女に変身したなぎさが立っていた!

なぎさの身体から滲み出たオーラは、まどかが究極の魔法少女になった時のものになつていた。色は白である。

な「マミー! こっちは大丈夫なのですー!」

巴「なぎさちゃん……!」

ほむ「でも、百江なぎさだけではなかつた気がする。」

忠「キサマハ、モモエナギサ! キサママデー!」

もう一度、火球を繰り出そうと手に力を込めたが、

ザツ!!

忠「ア、!?!」

突然腕が斬り落とされた！

ま「今の光…。」

杏「まさか！」

巨大怪魔の隣のビルに降りた、腕を斬り落としたその正体は…！

さ「みんな、おっ待たせー！」

見滝原の青の魔法少女、さやかだった！

ま「さやかちゃん！」

ほむ「美樹さやか…！」

巴「美樹さん！」

杏「さやかっ!!」

さやかの身体から滲み出たオーラは、まどかが究極の魔法少女になった時のものに

なっていた。色は青である。

さ「さあ！ガンガンいっちゃいましょう！」

杏「つたく、さやかって奴は。」

巴「あら佐倉さん、また泣いてるわよ。」

杏「ウルセエ！」

忠「オノレエエ!!」

ガシツ！

忠「ナツ！ガアアッ！」

突如、誠が体内に引きずり込まれた！

ほむ「今度はなに？」

ま「やっぱり、マリアちゃんだ！」

巴「武呂さん？」

ま「カプセルを取り込む時、マリアちゃんが忍び込んだんですよ！」

ほむ「やるわね。」



杏「よっしゃ！このデカブツをたたくぞ！」

一同「うん！（ええ！）」

バシユツ！！

気がつくのと、5人は全員空を飛んでいた。自由に飛びながら、敵を一方的に攻めるその姿は、裁きを下す女神そのものだった。

杏「行くぜさやか！」

さ「おう！」

ドルルルツ！！

キキキキツ！！

無数の機関銃の弾を弾き、

さ&杏「おらっ！」

ザクツ！！

かなりの硬度だったが、脚を一本斬った！

さ「やったあ！」

杏「！ さやか！」

さ「あつ」

火球が目の前まで来ていた。

しかし、

さ「え？」

ほむ「ちやんと前を見なさい。」

さ「悪い悪い。」

ほむらが今度こそ時を止めて助けた。

さやかは今までほむらのことが気に入らなかったが、全ての記憶があるさやかにはどうでもよかった。

杏「今ならたぶん、使える……！」

杏；「ハイパー・ロツソ・ファンタズマ」

杏「ロツソファンタズマ！」

強くなった杏子は、50人にも分身できた！

杏×50「行くぜー！」

50人の杏子が一斉に攻撃した！

弾や火球や紐が入り乱れていたが、強くなった杏子が50人居れば何の問題もなかった。

巴「とびつきりを撃つわ！」

巴；「ハイパー・テイロ・ファイナーレ」

巴「テイロ、ファイナーレ!!」

ドオオオンツ!!

ドツゴオオンツ!!

さらに脚一本を消しとばした！

怪魔から無数の弾や火球が放出されていたが、それら全てをなぎさが魔法の泡で相殺していた。よって、更なる被害は出なかった。

怪魔は完全に動けなくなり、外殻もすでにボロボロだ。

ほむ「まどか、トドメを刺すわよ。」

ま「わかった！」

2人はそれぞれ弓を構え、

ま&ほむ；「コンビネーション・スターライトアロー」

ま&ほむ「はああっ！」

ビツ!!

同時に穿った！

そして、怪魔の中心に命中し、

ドカーンッ!!

大破した。

5人は1カ所に集まった。

ま「みんな、大丈夫?」

ほむ「問題ないわ。」

さ「へーきへーき。」

巴「おかげさまでね。」

杏「みんなでかかれば楽勝だったな。」

ゴトツ

残骸から、傷だらけのマリアが現れた。

ま「マ、マリアちゃん!」

武「ようまどか。無事みたいで何よりだぞ。」

ま「うわあああん！」

マリアに抱きついた。

巴「武呂さん、今までありがとう。」

武「マミさん、思い出したんですね。」

巴「ええ、この通り。」

杏「あいつはどうなったんだ？」

武「みんなのおかげで、トドメを刺せたぞ。」

一瞬静まり、

一同「やったああ!!」

歓声を上げた。

ほむ「今度こそ、みんな生き残って、見滝原を守れたのね。」

さ「あ、あれ見て！」

怪魔の残骸から、大きな人魂のようなものが現れ、高く飛んだ。

忠「ユルサナイ。ユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイ！」

呪いを生み始めた！

さ「次は、魔女……！」

巴「まだ終わりじゃないみたいね。」

ま「…わたしが行きます。」

ほむ「!! まどか！」

ま「大丈夫だよ、ほむらちゃん。」

まどかは歩いてその人魂に近づいた。

その姿は、魔法少女から女神の姿へと変化していく。

ほむ「待って、まどか!!」

第13話へ、続く…。



## 第13話 「わたしの、最高の仲間たち」

### ●魔法少女データ●

??美樹 さやか（ハイパーさやか）

・サーベルやカットラスのような「剣」を操り闘う魔法少女。

・明るく元気で活発な性格。しかし、思い込みで失敗することもしばしば。

・願いは、「恭介の手を治すこと」である。

・本作における彼女は、原作とは全く別の人物であり、「創られた世界」の人物である。

怪我をした恭介の手を取るまで、自分が何者だったのかを思い出せなかったのがその証拠だ。

・記憶を取り戻し、願い無しで因果を繋いださやかは、最後の願いを叶えたまどかと同じ力を宿し、究極の魔法少女として蘇った！

・ハイパーさやかとは、魔法少女美樹さやかの究極形態のこと。

・魔法少女としての経験を積みなかったことが多かったが、忠岡 誠との戦いでは見事仲間を勝利へと導いた。

??百江 なぎさ（ハイパーなぎさ）

・魔法のラップを操り闘う魔法少女。

・控えめで寂しがりな性格。

・願いは、「母にとつてこの世で一番美味しいチーズケーキが欲しい」である。しかし、他にもあるかもしれない。

・本作における彼女は、原作とは全く別の人物であり、「創られた世界」の人物である。デパートでほむらに助けられ、自分が何者かを考え直すまで、自分が何者だったのかを思い出せなかったのがその証拠だ。

・記憶を取り戻し、願い無しで因果を繋いだなぎさは、最後の願いを叶えたまどかと同じ力を宿し、究極の魔法少女として蘇った！

・ハイパーなぎさとは、魔法少女百江なぎさの究極形態のこと。

・本作では確かにまどかの波動を受けてはいるが、少ないきっかけで記憶を繋ぐという、天才と呼ぶべき魔法少女である。

くまだ誰も知らない物語く 第13話

〔見滝原中央区画〕

忠「ユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイ！」  
ゴオオツ!!

人魂は高く飛び上がり、見る見るうちに悍ましい姿へと変わっていく…。  
そして、アルティメットまどかに近い姿になったまどかも、ゆっくりと飛び上がった。

武「あの姿は…!」

ほむ「ダメっ! その姿になったら貴女はまた、独りになってしまう!」

ほむらはロケットランチャーを誠に向けた。

さ「待って。」

ほむ「待たないわ!」

さ「まどかは大丈夫って言ってたよね。少しは信じてあげなさいよ。」

ほむ「…。」

杏「私たちが今までできなかつたことが今できるじゃねえか。大丈夫なんじゃねえの

?」

ほむ「で、でも…。」

巴「様子を見ましょう、ね？」

ほむ「…。」

ロケットランチャーを下ろした。

ま「もう、苦しまなくていいんだよ。」

忠「ユルサナイユルサナイユルサナイ」

ま「今まで辛かったよね。でも、もう大丈夫。」

忠「ユルサナイユルサナイユルサナイ」

ま「魔女になる前に、あの世界へ。」

忠「カナメマドカアアアツ!!」

ま「っ!!」

ズオツ!!

忠「ガッ!」

手のひらから魔法陣を瞬時に出現させ、誠を吸い込んだ!

ま「これで、終わった…。」

空中に浮遊していたまどかは、魔法少女の姿に戻り、5人が待つビルの屋上に降りた。

武「まどか。」

巴「鹿目さん。」

杏「まどか。」

さ「まどか。」

ほむ「…まどかあああ!」

ギュッ!

ま「ほむらちゃん!」

ほむ「うううう!」

泣きながら抱きつかれた。

さ「そういえば、こんなほむらは見たことないかも。」

杏「さやか。」

さ「また会えたね、杏子。」

杏「…！」

ギョツ

さ「え、ええ？」

さやかも杏子に抱きつかれた。

杏「バカヤロウ。何度も死んでんじゃねえよ…。」

何度もとは、繋がった数々の記憶にあつたことである。

さ「まさか、あんたが泣くなんてね。」

杏「な、泣いてねえし！」

巴「ふふ、よかつたわね。」

ま「ママさん。」

さ「ママさん。」

巴「あら？どうしたの？」

ま&さ「うえええん！」

ギョツ！

巴「え!?!」

今度はママが2人に抱きつかれた。

杏「へっ、また会えてよかったじゃねえか。」

杏子は自らママと背中を合わせた。

巴「佐倉さんまで。」

ほむ「…。」

巴「暁美さんも来ていいのよ？」

ほむ「私は…。」

杏「そうだぜ。アタシら散々ほむらに迷惑かけたみたいだしな。」

巴「そうよ。」

さ「感謝はしてるよ。」

ほむ「…。」

ほむらはそつと肩を寄せた。ほむらはただ、温かい、と思つた。

な「マミー！」

巴「なぎさちゃん！」

な「みんな無事で良かったのです。」

さ「病院の方はありがとね。」

な「やれやれなのです。」

武「仲間って、やっぱりいいな。」

ま「マリアちゃん！」

ギユツ！

武「はっ!？」

ま「生きててよかったよー！」

武「言うの忘れてたな。あたしはな、倒すと決めた相手を倒すまで死なない能力があるんだ。」



「でも瓦礫のせいでその能力が不発してな。まどかが退いてくれたおかげで来れたぞ。ありがとな。」

ま「ぐすつ、そんなこと…。」

杏「！ みんな、聞こえるか？」

耳を澄ませると、街の人々の歓声が聞こえた。

さ「あたしたち、感謝されてるんだね。」

巴「こんなの、初めて。」

杏「結界で闘ってないしな。」

な「ちよつと恥ずかしいのです。」

武「あたしも初めて聞いたぞ。」

ほむ「…。」

ま「よかったね。みんなを守れて。」

破壊された街の中心で、7人の気高い魔法少女は民衆に手を振った。

•  
•  
•

???

忠「カナメマドカ」

悍ましい姿になりかけた誠は、謎の空間で彷徨っていた。

ア「見つけた。」

忠「オマエハ、カナメマドカカ？」

ア「うん。」

忠「アアアアアアッ！」

誠はアルティメットまどかに襲い掛かった。しかし！

忠「ナニ？」

触れた感覚が何もなく、自分の攻撃が無くなった。

ア「自分の使命のために、ずっと頑張ってきたんだよね。さあ、行こう。」

忠「ア、アア…」

誠は、光に包まれた。

•  
•  
•

〔病院〕

翌日の朝。

医者「信じられない。完全に治っている！」

恭「僕も驚いてます。」

恭介の腕の怪我は、完治していた。無論、さやかがあの後、こつそり病院に寄つて魔法で治したからである。

医者「でも一応、リハビリは受けてくださいね。」

恭「わかりました。」

医者は病室から出た。

さ「は、入つていい？」

恭「さやかか。いいよ。」

さやかは、正式に別れることを伝えるに来た。仁美はもう居ないが、人間の身体でなくなつた今、関係を続ける訳にはいかない。

さ「その、怪我治つてよかつたね。」

恭「うん。不思議だよ。」

さ「今日はさ、話があつて来たんだよ。」

恭「その前に、僕の演奏を聴いてくれないか？」

さ「は、はあ？」

恭「今無性にヴァイオリンを弾きたいんだ。1日しか触れていないはずなのに、ずっと触つてなかつた気分です。」

さ「…わかつたわ。」

屋上に場所を変え、恭介の演奏を聴いた。

これが最後になると思うと泣きそうになつたが、必死に堪えた。

さ「恭介つてほんとに上手だよね。」

恭「これもさやかのおかげだよ。」

さ「いやいや、あたしなんて何も」

恭「腕を治してくれたの、さやかだよね？」

さ「…え？」

予想出来なかつた発言に、言葉を失つた。

恭「今朝のニュースで見たけど、ビルの屋上に居た魔法少女の1人ってさやかだよ。みんなよく見えないって言ってたけど。見滝原を救った上に、僕の腕まで治してくれて。」

さ「そ、その」

恭「実は治してくれた時、寝たふりしててさ。でも、こうやってちゃんと聞いたかったんだ。」

「さやか、ありがとう。」

さ「恭介……。ぐすっ」

「うわあああん!!」

ギョッ!

昨日と比べ物にならない程泣いた。

な「さやか、本当によかったのです。」

物陰から見守っていた。

・  
・  
・

それから一転、まどかやほむら、さやか、杏子は真剣に受験勉強に取り組んだ。

まどかはママが通う高校へ入学するため、ほむらはまどかについていくため、さやかは恭介が入学しようとしている高校へ入学するため、杏子は父を喜ばせるため難関私立に入学するためである。

杏子は風見野の中学生だが、よく見滝原に来ていた。ママに勉強を教えてもらうためだけでなく、仲間たちと過ごしたかったからである。ママに勉強を教えてもらうため

マリアはと言うと、結局元の世界には帰れなかった。まどかに触れれば帰れる可能性があるのだが、失敗した時はとんでもないことになるのでやめておいている。今まで通り、ママの部屋で暮らしている。

なぎさは、母に許可をもらってよくママの部屋で泊まるようになった。なんでも、ママが作るチーズケーキが美味しいんだとか。

あの戦いの後、世間は魔法少女のニュースで持ちきりになった。巨大怪魔のせいで近

寄れず、画質が悪かったせいで彼女らの判別が出来なかった故に英雄探しが流行ったり、ドラマやアニメが量産されたりと、一世を風靡した。

7人の中に正体を明かしたいと考える者は居なかつたので、正体はバレずに普通の生活を送れた。

数ヶ月という月日はあつという間に流れ、遂に試験日を迎えた。

ま「(大丈夫、きつと大丈夫。)」

司会「それでは、試験を始めてください。」

ま「(みんな頑張ってるんだもん。わたしだって、頑張る!)」

魔法少女まどか?? マギカ

く誰も知らない物語く

〈完〉



## 第2章？明日への物語？

### 第14話 「こうして続いていくんでしようね」

さ 「読者の皆様、明けましておめでとうございます！」

「今は受験シーズン！みんな勉強頑張ってるわよ！勿論、たまに現れるようになった怪魔もみんなと協力して倒してるわ。」

「さてさて今回はあの闘いの後日談！あたしたちのいろんな一面を見れちゃうかもしれないわよ！是非とも最後まで」

杏 「ウゼエ！」

さ 「わっ！何よ杏子。」

杏 「明けましておめでとうじゃねえよ。もう一月終わっちゃうじゃんか！」

さ 「それは…。」

杏 「それに続きらしい続きじゃないじゃねえか。おまけじゃんか。」

さ 「それはいろいろあるのよ（設定とか）。」

杏 「しかもアタシらのイラストを考えてるとか言ってたけど、全然出来ねえじゃねえか。」

さ「それはどうやら今頑張ってるみたいよ。」

杏「ふうん……。ま、期待しないで待っとくよ。」

さ「以上、試験受かって絶対調のさやかちゃんと、ツツコミ担当の杏子からでした！  
それでは本編をお楽しみください！」

杏「ちよつと待て！おいこら！」

くまだ誰も知らない物語く 第14話

〔鹿目邸〕

ま「んー、ここわかんないなあ。」

ほむ「まどか、その答えはこうよ。」

ま「ありがとう。ほむらちゃんはやつぱり頭いいなあ。」

ほむ「貴女の為なら答えられるわ。」

ま「勉強ってそういうのじゃないんじやないかな……。」

まどかとほむらは、まどかの家で受験勉強をしていた。ほむらは既に合格ラインを余裕で突破しているのだが、こうしてまどかに勉強を教えている。

ほむ「お疲れ様。一旦終わりましたよ。」

ま「はあく、疲れた。」

ほむ「このペースなら、志望校は合格できるわ。」

ま「ほんとに!?!」

ほむ「ええ。貴女ならできるわ。」

ま「ほむらちゃんは、わたしと同じ高校でいいの？もつと頭いい高校も合格できそうだけど。」

ほむ「いいのよ。私は貴女が行きたい所へ行きたいから。」

ま「ほむらちゃん。」

ほむ「休憩でエオンモールに行くのはどうかしら？」

ま「行く行く！もうお腹ぺこぺこだもん。」

エオンモール見滝原テラスは怪魔アプリコットによって倒壊したのだが、現在は修理が進み、開業するまでには戻ったのであった。

ま「パパ、エオンに行ってくるね！」

知「うん、気をつけてね。まどかなら大丈夫だろうけど。」

ま「え？なんで？」

知「なんせこの見滝原を救った自慢の娘だからね！」

ま「うう、恥ずかしいから言わないでよう。」

親とは流石なもので、知久だけでなく詢子にも最初からバレていた。中継にほんの少し映っていたからである。

ほむ「秘密を守ってください、ありがとうございます。」

知「いいんだよ、行ってらっしゃい。」

まどかとほむらはエオンに向かった。

•  
•  
•

「エオンモール見滝原テラス・フードコート」

杏 「ズズズつ、このラーメンも悪くないな。」

さ 「こら、もつと綺麗に食べなさいよ。」

杏 「? どこも汚してないだろ?」

さ 「そういうことじゃなくて。」

武 「ほんとに奢ってもらっていいのか? さやか師匠。」

さ 「師匠はやめてっば!」

3人は、午前の魔法少女の特訓が終わり食事をとっている。

マリアがさやかを師匠と呼ぶようになったきっかけは、数ヶ月前に遡る。

くく

一学期最後の授業を終え、その帰り道で起きた出来事である。

さ 「いやー、やっと夏休みが始まるね。」

ま 「そうだね。わたしたち、あんまり夏休みを迎えた記憶がないし。」

さ 「うっ、そういうこと言わないでよ。」

ま「あ、ごめん。」

夏休みが始まる前に命を落とすことが多かったため、魔法少女としての夏休みは新鮮である。

武「あ、いたいた。」

ま「マリアちゃん、どうしたの？」

武「いや、まどかじゃなくてさやかに用があつて。」

さ「？ あたし？」

武「さやか、あたしを弟子にしてくれないか？」

さ「え？ 弟子い？」

武「あたしはもっと強くなりたいたいんだ。でもそのためには、自己鍛錬だけじゃ無理だつてわかつた。」

「だから憧れの魔法少女のさやかに鍛えて欲しいんだ。」

さ「あ、憧れだなんてそんな。」

照れた。

ま「さやかちゃん、受験勉強は大丈夫なの？」

さ「そうそう、勉強しなくちゃいけないから難しいと思うわよ。」

武「たまにでいいんだ。あたしを鍛えてくれ！」

さ「うーん。」

と、マリアに懇願されたため、特訓することには了承した。

（（

武「今まで何回か稽古つけてくれたけど、やっぱりさやか師匠や杏子姐さんには敵わないぞ。」

杏「姐さんって呼ぶな！」

さ「まー、沢山の因果繋いじやってますからね、あたしたち。」

杏「にしてもさ、さやかなんかを師匠にしちやって大丈夫なわけ？アタシは心配でしょうがないんだけど。ズズズ。」

武「そうか、師匠が心配だからいつも特訓に付き合ってくれてるのか。」

杏「ち、違う！アンタが心配なんだよ。」

さ「つて、言ってるけど、よくあたしのソウルジェムの調子とか訊いてくるわよ。」

武「やっぱり姐さんって本当は優しいんだな。」

杏「ウ、ウルセエ！」

恥ずかしくなり、顔を手で隠した。

武「師匠、あたしはどうやったら強くなれるんだ？」

さ「んー、この前の怪魔との闘いを見て思ったんだけど、何っーかな、前も言ったけどあんたは勢いが足りない気がするんだよね。何っーかこう、ズガガガツと攻撃した方がいいと思うわけよ。」

武「勢い、か。」

さ「そ。あんたは攻め続ければ勝てる相手にも、一度考えて止まっちゃうから反撃されるって思うわけ。」

武「なるほど。」

杏「ハンっ、それは違うな。」

武「え？」

杏「考えることは必要だよ。考えた上で攻めるか様子を見るかを瞬時に判断する。こ



れが鉄則だよ。」

さ「なに？あたしのやり方に文句あるわけ？」

杏「だから、アンタのやり方じゃすぐ死ぬって言ってるんじゃない。」

さ「それがあたしのやり方なの。あたしの弟子なんだからいいでしょ。」

杏「フンっ、アタシだって姐さんって呼ばれてるんだぜ。」

さ「うーわー、ここで急に姐御ヅラした。」

杏「文句あるかよ。」

さ「文句しかないんですけどねー！」

武「ま、また始まった。」

杏「アタシはマリアのために言ってるんじゃない。アンタまでこいつみたいに早死にさせるわけにもいかねえっの。」

さ「はあ？あたしが死んだらあんたが一番泣いてるくせに！」

杏「ウルセエ！」

武「ちよ、喧嘩はやめてくれよ。」

巴「あら？佐倉さんに美樹さんじゃない。」

さ&武&杏「マミさん（マミ）。」

な「こんにはなのです。」

武「お！なぎさもいるじゃないか。」

巴「なぎさちゃんのものを買いにね。もう、また喧嘩してたのね。」

佐「さやかが悪い。死にやすい戦法を弟子に教えるから悪いのさ。」

さ「そんなつもりで教えてないっつーの。あたしは良かれと思って。」

武「ん？師匠と姐さんってやっぱ喋り方ちよつと似てるぞ。」

さ&杏「似てねー！」

な「息びつたりなのです。」

巴「そうねえ。武呂さん、参考にするにはいいことだと思うけど、貴女は貴女のやり方でいいのよ。」

「ただし、後悔は絶対しないこと。いいわね？」

武「わかりました！」

さ「流石ママさん。」

杏「ちえっ。」

ピピピ

さ「あ、ちよつと取ってきますね。」

注文したランチができたようだ。

な「なぎさも見てくるのです！」

巴「迷子になっちゃダメよ。」

な「大丈夫なのですー！」

武「あたしも師匠が心配なのでついていきます。」

杏「おう。」

巴「…。」

杏「どうしたんだよ、ニヤニヤして。」

巴「ちよつと、嬉しいなつて。」

杏「何がだよ。ズズズ。」

巴「覚えてるわよね、貴女が私の弟子だった頃のこと。」

杏「ちよつと恥ずかしいな。」

巴「そんな貴女に美樹さんという弟子ができた。」

杏「あんなの弟子じゃねえよ。」

巴「そして、その美樹さんに武呂さんという弟子ができた。」

「魔法少女つて、こうして続いていくんでしょうね。」

杏「…。」

巴「繋いだ因果もあるし、なんだか年を取っちゃった気分ね。」

杏「…そうだな。ママはアタシよりもババアになったってこ」

巴「な あ に ?」

杏「ぐえ!ぐるじい!」

笑顔で首を絞めた。

武「戻りました。」

さ「いやー、悪いね。持ってもらっちゃって。」

武「最近師匠は元気なさそうだからな。」

巴「気づいてたのね。」

さ「いやいや、そんなことないって。って杏子、どうしたんですか?」

顔を青くしてテーブルに顔を落としている。

巴「満腹で寝ちやっただみたいよ。」

武「(絶対嘘だぞ)」

な「お待たせなのです。チーズグラタンにしたのです。」

さ「あんたほんとにチーズ好きね。」

な「勿論なのです！この世からチーズが無くなったらなぎさも死ぬのです。」

武「じゃあ何としてでもチーズは守らないとな。」

さ「そこは真面目に答えなくても…。」

巴「話を戻すけど美樹さん、本当に大丈夫なの？」

さ「大丈夫ですって！あたしはもう受験終わりましたし。」

アナ「ニュースをお伝えします。」

フードコートのテレビ画面にニュースが映し出された。

アナ「昨晚、見滝原銀行を襲った5人のテロ集団が、あの魔法少女と警察の活躍により、現行犯逮捕されました。」

「警察の調べによりますと、テロ集団は犯行の際、銃火器を用いて銀行を襲撃した模様です。しかし、我々の魔法少女一人が鎮圧し、警察が安全を確認した後逮捕したとのことです。」

「テロ集団の男たちは、金が欲しかったと供述しており、また、奴は化け物だと供述して

おります。」

武「…これあたしじゃないぞ。」

な「なぎさは知らなかったのです。」

巴「行こうか迷っていたら鎮圧されたわ。」

杏「アタシは事件とか興味ないし、決まりだな。さやか、ソウルジエムを見せろ。」

さ「まま待つて、ほら、まどかやほむらかもしれないじゃん！」

ま「あ、みんな〜。」

ほむ「まさか全員いるとはね。」

巴「鹿目さん、曉美さんも。」

武「ちようどいいところに来たな。2人ともソウルジエムを見せてくれよ。」

ま「え？いいけど。」

ほむ「構わないわ。」

2人の指輪がソウルジエムへと姿を変えた。2つとも光り輝いている。

杏「ほら、早く見せろよ。」

さ「うう…。」

さやかあのソウルジエムは、かなり濁っていた。

杏「だから言ったじゃんか。アンタの闘い方じゃすぐ死ぬって。」

ほむ「上条恭介が悲しむわよ。」

さ「……ごめん。」

ま「さやかちゃん、ソウルジエムを貸して。」

さやかあのソウルジエムを手に取り、穢れを浄化した。

ま「これで大丈夫だよ。無理しないでね。」

さ「まどか、ありがとう。」

武「師匠のことだから、きつと受験が終わった自分が頑張らないとって思ったんだぞ。」

な「流石正義の魔法少女なのです！」

さ「やめてよ恥ずかしい！」

巴「でも美樹さん、無理しちゃうダメよ。濁り始めたらすぐ鹿目さんに浄化してもらわ

ないと。」

武「みんなまどかに浄化してもらわないと、回復できないですもんね。あたしは怪魔を倒せばそのカプセルで治せるからいいですけど。」

杏「グリーンシードもグリーンフキユーブもないんだからしょうがねえじゃん。」

な「そのカプセルじゃなぎさたちの穢れは取れないのです。」

ま「わたしは、休んだら取れるけど。」

さ「くー！羨ましいなー！」

ほむ「まどかだから当然よ。」

杏「そういうほむらも休んだら回復してるじゃんか。」

ほむ「私は例外よ。」

さ「…。」

纏めると、まどかとほむらは休息を取れば回復し、マリアは怪魔カプセルで回復し、他の4人はまどかの浄化で回復するということである。

ま「思っただけけど、わたしたちって度々魔法少女になって闘ってるのに、なんでまだバレてないのかな。」



ほむ「声が大きいわ。」

ま「あ、ごめん。」

杏「そりやアタシが幻惑をかけてるからに決まってるじゃん。」

巴「佐倉さんのおかげだったのね。」

杏「いいんだよ。みんながバレたらアタシもそのうちバレるじゃんか。」

さ「いやー、それ聞いて安心したわ。昨日だってわざわざ仮面つけて闘ったんだし」

杏「勿論アタシがいる時だけだよ。」

さ「えっ。」

ほむ「ちよ。」

巴「えっ…。」

ま「フエっ」

武「あたしは別にいいけど。」

杏「さやかあ？バレたら殺すぞお？」

さ「き、気をつけます…。」

巴「気をつけるわ。」

杏「アンタもかよ。」

ほむ「だ、大丈夫よ。」

ま「わたしも、たぶん…。」

杏「おいおい。」

武「ん、もうこんな時間か。みんな悪い、これからジムのおつちゃんたちと筋トレする時間だから失礼するぞ。」

ま「そつか。じゃあね、マリアちゃん。」

巴「…。」

さ「あたしも帰ろうかなー。」

杏「待てよ。アタシに勉強教える約束したじゃんか。」

さ「あーれー？教えてもらう相手に殺すとか言っつていいのかなー？」

杏「う、すみません、でした。勉強、教えてください…。」

さ「決まり！じゃあねみんな！」

巴「勉強頑張つてね、佐倉さん。」

杏「はーい。」

ま「さやかちゃん、愛されてるなあ。」

ほむ「貴女程ではないわ。」

巴「そうよ。他人と比べたらダメ。幸せになれないわよ。」

ま「マミさん、ほむらちゃん、ありがとうございます。」

な「ママは何か食べないのですか？」

巴「私はいいわ。ダイエットしてるし。」

な「ママはアイドルと比べて太ってるとか言ってたのです。」

ほむ「巴さん、他人と比べたら何て？」

巴「さ、さあ帰るわよべべ。」

な「その呼び方はやめて欲しいのです！」

ま「さようなら、ママさん。」

ほむ「また会いましょう。」

なぎさは会話中に完食していたので、すぐに帰った。

ま「わたしも受験勉強頑張らないとなあ。」

ほむ「そうね。でも貴女ならきつと大丈夫。」

ま「ありがとう、ほむらちゃん。」

こうして、まどか、ほむら、杏子は改めて受験勉強に励んだ。試験まであと僅か。しかし、きつと彼女たちなら大丈夫だろう。

何故なら魔法少女は、夢と希望を叶えるのだから。

## 第15話 「ハッピー、バレンタイン！」

ま「皆さん、いつも読んでくださりありがとうございます。」

「今日はバレンタイン！受験勉強は、ほむらちゃんのおかげで順調だから、わたしもパパやみんなにチョコを作ろうと思うの。ママさんには敵わないけど、わたしなりに頑張ってみる！」

ほむ「その意気よ、まどか。」

ま「ほむらちゃん!？」

ほむ「私もまどかのためだけにチョコを作るわ。」

ま「男の子にはあげないのかな。」

ほむ「考えたこともないわ。」

ま「ほむらちゃん…。」

武「よくわかんないけど、女が女を好きになることってレ」

ほむ「それ以上は私が許さない。」

武「悪かったって。」

ま「マリアちゃんまで!？」

ほむ 「私はまどかを愛してるだけよ。」

武 「ええ…。」

ま 「マリアちゃんは、チョコ作らないの？」

武 「あたしもママさんからいくらか教わってるから、ジムのおっちゃんたちに作るつもりだぞ。」

ま 「そのおじさんたちと仲良しなんだね。」

武 「まあな。」

ほむ 「まどか、もう時間がないわ。」

ま 「何の？」

ほむ 「もうチョコを作らないといけないわ。」

ま 「え？もう作ってるよ。」

武 「待って待って、その日に作るもんじゃないのか？」

ま 「流石にバタバタしちゃうし、前日までに作るよ。」

ほむ&武 「…。」

ほむ 「すぐに作るわ。」

ほむらはパッと消えた。

武「マミさーん！台所貸してください！」

マリアは走って出て行った。

ま「大丈夫かな…？」

くまだ誰も知らない物語く 第15話

〔鹿目邸〕

ま「行つてきまーす。」

知「行つてらっしやい。」

まどかは、魔法少女のメンバーとバレンタインパーティーをするため、マミの部屋へ向かった。この日は日曜日のため、基本的にはみんなお休みである。

ま「みんな、どんなチョコを持ってくるかな。ウエヒヒヒ」

胸を高鳴らせ、歩き出した。

・  
・  
・

「マママンション」

武「うおお！間に合ええ！」

巴「もう、お願いしても意味ないわよ。」

マリアは、冷凍庫に向かって叫びながら待機していた。普段から料理やお菓子作りをママに叩き込まれていた為、手際よく作っていたのであった。しかし、固まるまではただ待つことしかできない。

武「だってもうすぐみんな来ますよ！あたしだけ出せないなんてダメです！」

巴「なんで前日までに作らなかつたの？」



武「ばれんたいん？つて日にみんなでチョコ作るんだと思ってまして…。」

巴「それならみんなと予定を合わせないとダメ。」

武「すいません…。」

巴「別に謝ることじゃないけれど。」

な「お邪魔するのです！」

巴「なぎさちゃん、いらっしやい。」

な「とは言え、ママの部屋はほとんどなぎさの別荘なのです。」

巴「もう、調子いいんだから。」

武「残念だったな。あたしの場合は実家だ。」

巴「胸を張って言うことじゃないと思うわよ。」

な「むむむ、いいのです。なぎさはママのマブダチなのです。」

武「甘いな。あたしとママさんは生活を共にするパートナーだ。遊びに来るだけのなぎさとは違うぞ。」

両者は一步も譲らない。

巴「また喧嘩して…。仲直りしないとどっちも部屋に入れてあげないわよ。」

な「それは困るのです！」

武「いやあたしは死活問題だぞ！」

その時、インターホンが鳴った。

さ「おつ待たせー！」

武「師匠！早いな。」

巴「いらっしやい、美樹さん。」

な「いらっしやいなのです。」

さ「あなたの家じゃないでしょ。」

「マミさん、みんなはまだなんですわね。」

巴「ええ、美樹さん早かったわよ。」

さ「張り切ってましたので！」

武「恭介にあげるんだもんな。」

さ「言わないでったら！」

な「マミは彼氏とかいないのですか？」

さ&武「あっ」

巴「ま、まあ、そのうちね。」

な「え、ママなら絶対いると思ってたのです！」

さ「いや、それフォローになってないから。」

武「ほら、あたしにもいないので大丈夫ですって。」

さ「それもフォローになってないわよ！」

武「なっ、フォローになってないってどういうことだ！」

さ「あ、いや、そういう意味じゃなくて。」

そして、またインターホンが鳴った。

杏「邪魔するぜー。」

武「姐さん！」

巴「姐さん？」

杏「わっ、その呼び方やめろって！」

巴「そのことは後で聞くとして、佐倉さん、いらっしやい。」

杏「勘弁してくれよ…。」

さ「杏子はどんなチョコ持ってきたの？」

杏「て、手作りチョコ、だけど。」

な「らしくないのです。」

杏「ウルセエ!」

さ「へー、美味しく出来たのかなあ?」

杏「まあ、不味くはないと思う。」

さやかはチョコ作りに慣れているため、杏子より上手く作れた自信がある。

巴「あとは鹿目さんと暁美さんね。」

な「一緒に来そうなのです。」

武「一緒に来るぞ。」

杏「ホントだな。」

さ「みんなのその魔力探知能力、ほんとに羨ましいわ。」

魔力探知においては自信がないようだ。

ま「お邪魔します。」

ほむ「お邪魔するわ。」

巴「いらつしやい、2人とも。」

武「よおまどか。」

ま「マミさんこんにちは。 MARIAちゃん、久しぶり。」

さ「まどかとほむらも到着したことだし、パーティーを始めましょう！」

武「あ、ちよつと待つてくれ。…よし、ギリギリ出来たぞ！」

な「やれやれなのです。」

巴「それじゃあ、せーのっ」

一同「ハッピー、バレンタイン！」

さ「杏子、あんたなかなかやるじゃないの！」

杏「そ、そうか？」

ま「りんごチョコ美味しいよ、杏子ちゃん！」

杏「よ、よかつたぜ。」

な「MARIAのチョコは意外と綺麗なのです。もつとガサツだと思つてたのです。」

武「褒めてるかそれ。」

巴「美樹さんは流石ね。」

さ「マミさんに褒められるとかめちやくちや嬉しいんだけど！」

な「でもママには全然敵わないのです。」

さ「そういうこと言わないの。」

ほむ「どうかしら？ 私のチョコは。」

ま「すつごく美味しいよ、ほむらちゃん！」

ほむ「その笑顔を見ただけで、私は幸せよ。」

武「あたしにもくれよ。」

ほむ「残念だけど、これはまどか専用よ。」

武「いただきます。はむっ」

ほむ「ちよ。」

武「おっ、美味しい。」

ま「美味しいよね！」

武「まどか専用にしたのに全部ハート形って。やっぱほむらってレ」

ほむ「今度こそ許さないわよ。」

武「待て待て！時間を操れる魔法少女に勝てるわけないぞ！」

ほむ「わかればいいのよ。」

ま「ほむらちゃん…。」

こうして7人は、各々が持つてきたチヨコを食べ合い、楽しいひと時を過ごしたのであった。

・・・

〔上条邸前〕

恭「やあさやか。いらっしやい。」

さ「あ、えつと、邪魔じゃなかった？」

恭「いいや、全然。何か用かい？」

さ「あんた、今日なんの日か知ってるでしょ。」

恭「ああ、そうだった。ということはもしかして。」

さ「そう。あんたに…、大好きなあんたに渡すものがあるのよ。」

恭「…ちよつといい？頼みがあるんだけど。」

さ「頼み？」

恭「ここじゃちよつと難しいから、上がつてくれるかな？」

さ「いい、いいけど。」

言われるがまま、恭介の家に上がった。そして連れてこられた場所は、恭介の部屋だった。

恭「さやか、ここで変身してくれないか？」

さ「ええ!なんですよ。」

恭「魔法少女の姿で渡して欲しいんだ。」

さ「ほんと恭介って魔法少女好きよね。」

恭介が魔法少女好きというこの設定、当小説オリジナルではなく、実は公式設定なのである(まどかマギカポータブルより)。なお、オタクのそれとは違うので注意していたきたい。

恭「だって魔法少女だよ!?!見滝原を救った伝説の英雄だよ!?!それが僕の彼女なんだよ!?!」

さ「声が大きいってば!」



恭「大丈夫。今この部屋の近くには僕たちしか居ないよ。」

さ「うう……。恥ずかしい……。」

恭「お願い、聞いてくれないかな。」

さ「わ、わかったわよ。」

ハイパー状態にならない程度に変身した。

恭「さやか可愛いよ!!素敵だよ!!」

さ「毎回言わないでったら!」

恭「それじゃあ、頼むよ。」

さ「えっと……コホン。」

「こんなあたしと付き合ってくれて、ありがとう。」

「だから、その感謝を込めて、大好きな恭介にこのチョコを、あげるわ。」

恭「……。」

さ「な、何よ。あたしにはこれが精一杯なんだけど……。」

恭「違うんだ。神々しくてつい黙り込んでしまった。」

さ「神々しいって……。そ、その……（恥ずかしすぎて死にそうなんだけど!）」

恭「さやか、ありがとう。さやかってチョコを作るのも上手なんだね。」

さ「たくさん練習したから、よ。」

恭「これは上条家の家宝にしよう!」

さ「今食べてよ!」

さやかは無事、ほんの少し酸っぱいがとても温かいバレンタインデーを過ごしたのであつた。

これからも、この2人は末長く幸せに人生を歩むことであろう。

そう、彼女の言う通り、奇跡も、魔法も、あるのだから。

## 第16話 「わたしたち、高校生になったんだね」

ほむ 「読者の皆様、いつもこの拙書を手に取ってください、ありがとうございます。」  
「そして、最新話をお待たせして申し訳ありませんでした。作者は多忙だったとか言い訳をしていたけれど、そんなものは甘えよ。絶対許さない。」

「話が逸れたわ。第16話からは、百江なぎさを除く魔法少女全員が高校生として生活しているわ。」

「そう。つまり、私とまどかとの青春が今始まるうとして」

武 「あつ、あたしもおっちゃんたちから支援されたおかげでこうこうつてやつに通うぞー！」

ほむ 「まったく、貴女はいつもタイムミングが悪いわね。」

武 「え？今だと思っただぞ。」

ほむ 「ま、まあいいわ。」

「それでは、第16話をお楽しみください。」

くまだ誰も知らない物語く 第16話

〔鹿目邸〕

ほむ「おばさん、おはようございます。」

詢「あらほむらちゃん、おはよう。」

ほむ「まどかは起きてますか？」

詢「それが今日もお寝坊さんなの。私はもう行かなきゃいけないんだけど、また起こしてもらってもいい？」

ほむ「勿論です。そのために来ましたから。」

詢「ありがとう。それじゃあね。」

ほむ「行ってらっしゃいませ。」

詢子がまどかより早いとはどういうことなのか。

ほむ「おはようございます。」

知「あ、おはよう。今日も悪いね。」

ほむ「いえいえ。」

知「ほむらちゃんの分も朝ご飯作れるけどどうかかな？」

ほむ「大丈夫です。もう食べてきましたから。」

知「そうか。あんまり来させるのも悪いから、次はほむらちやんの朝ご飯も作っておくよ。」

ほむ「ありがとうございます。お言葉に甘えさせていただきます。」

およそ高校生の対応力ではない。

一方、まどかの部屋では、

タ「姉ちゃ、姉ちゃあ、朝、朝。起きてえ。」

弟のタツヤが起こそうとしていた。

バタツ!!

ほむらは、勢いよくまどかの部屋のドアを開けた。そしてカーテンを開け、

ほむ「まどか、朝よ!」

ま「ウエエ！エエ…あれ？」

ほむ「何よその起き方。」

タ「姉ちや起きたね。」

まどかは、段々と詢子に近づいているのかもしれない。

こうして、ほむらとタツヤの活躍により、まどかは今日も起きることが出来たのであつた。

•  
•  
•

### 〔通学路〕

ここは、見滝原高校のメイン通学路。ここに出演するキャラクターは、見滝原高校に入学出来た者たちである。

ほむ「まどか。」

ま「なに、ほむらちゃん。」

ほむ「貴女は最近、寝坊が多いみたいね。」

ま「それは…。」

ほむ「何かあったの？」

ま「別に何かあってわけじゃないんだけど、最近変な夢を見るの。」

ほむ「どんな夢？」

ま「いろいろあるんだけど、例えば、キユウベえがわけわかんないことを話してきたり、知らない桃色の髪の子が、わたしに知らない本を渡してきたり。」

ほむ「キユウベえは見つけ次第始末するわ。」

ま「ほどほどにね。」

許可は降りた。

ほむ「その桃色の髪の子は、本当に記憶にないの？」

ま「うん、やっぱり思い出せないし。」

ほむ「そう。」

武「よお！まどか！ほむら！」

ま「あ、マリアちゃんおはよう。」

ほむ「おはよう。」

武「この時間にいるってことは、またまどかが寝坊したんだな。」

ま「ち、ちがうよう！」

ほむ「まどかの寝顔は可愛かったわ。」

武「やっぱりな。」

ま「もう！ほむらちゃん！」

ほむ「ごめんなさい。からかうつもりはなかったの。」

武「え、じゃあ本気で言ってたのかよ。やっぱり」

ほむ「あら、その次は何を言うつもりかしら？」

武「ナンデモアリマセン。」

ま「はあ、もうゴールデンウィークも終わっちゃったね。」

武「お馴染みの7人でのキャンプは楽しかったぞ。」

ほむ「怪魔が現れなければ最高だったわね。」

ま「そうだね。段々現れる回数が増えてるような…。」

武「あたしらは倒せば問題ないけど、師匠たちが心配だぞ。」

ほむ「ええ、原因を早く突き止めないと。」



そんな雰囲気をつち壊す者が、背後から走ってやってきた。

杏「よお！」

ま「あつ！杏子ちゃん！」

武「姐さん！」

ほむ「朝から騒がしいわね。」

杏「危ねえ。遅刻するところだったぞ。」

杏子は、姐さんという呼び方を黙認している。その訳は、この後わかることになる。

ま「杏子ちゃんもだったんだね。」

杏「まどかも最近ねぼすけどもんな。」

ま「ティヒヒヒ」

杏「褒めてねえんだけど…。」

武「…今日はまだ見当たらないぞ。」

杏「ああ。安心だね。」

ま「あ、杏子ちゃんの男友達？」

杏「友達っていうか、よくわかんねえ。」

ほむ「噂をすれば来たわよ。」

杏「はっ!？」

前方から、3人の男子生徒が走ってきた。

?「おざつす!総長お!」

「今日はどこの島を攻めますか!」

杏「勝手に攻め込むことにしてんじやねえよ!」

?「副総長もおざつす!」

武「オツス!」

マリアは乗り気だ。

杏「ちよつとちよつと、乗せられてんじやねえよ。」

武「?結構楽しいぞ。」

杏「はあ…。」

こうなってしまった原因は、入学して間もない頃の出来事にある。

くく

ま「わたしたち、高校生になっただね。」

ほむ「ええ。まどかが合格できて私は嬉しいわ。」

ま「ほむらちゃんのおかげだよ。たぶんギリギリだったと思うし。」

ほむ「最後に結果を出したのは貴女よ。」

ま「ありがとう、ほむらちゃん。」

杏「まどか、アンタもこのクラスか？」

ま「そうだよ、杏子ちゃん。」

杏「しかもほむらやマリアまでいるじゃねえか。」

ほむ「私は当然よ。」

武「コツを掴んだら楽勝だったぞ。」

ま「うう…。」

そんなほのぼのした雑談を壊す怒号が聞こえた。

？「おおい！金まだあ？」

男子「ひっ、まだないです…。」

入学してさほど日には経っていないと言うのに、気の弱い男子をカツアゲする腕の太いこの少年は、勇哉というヤンキーである。

ま「な、なんだか怖いね。」

武「いやまどかなら瞬殺だぞ。」

ほむ「優しいのよこの子は。」

杏「…ちよつと行ってくる。」

ま「えっ、杏子ちゃん？」

武「あっ。」

マリアはこの後の結末を察した。

杏「おいアンタ。」

勇「ああ？なんだおめえ。」

杏「自分より弱い奴いじめて楽しいかよ。」

勇「金ねえって言ってるだろ。」

杏「そんなもん自分でなんとかしな。」

杏子が言うのと説得力が違う。

勇「うぜえ。」

杏「なんか言った？」

勇「∴放課後校舎裏に来いよ。」

杏「上等じゃん。」

その結果は、読者の皆様の予想通りである。

くく

という経緯があり、勇哉と肩を並べる他2人も、杏子に挑んで敗れている。穏やかな

表情をしたヤンキーは吉史、渋顔のヤンキーはカツヒロという名前である。

この3人はいつもつるんでいるらしく、中学時代から「見滝原のエリートヤンキー3人組」と恐れられている。

吉「焼きそばパンいるっすか？」

杏「おつ、サンキュー。」

ま「それは貰うんだね。」

武「姐さんはその辺上手だぞ。」

カ「副長もいるっすか？」

武「あざっす！」

杏「アンタも貰ってんじゃん。」

武「貰えるもんは貰う、当たり前だぞ。」

杏「ま、いつか。」

次の瞬間、ほむらの顔が青くなった。

ほむ「みんな大変よ。」

勇 「どうしたっすか？」

ほむ 「校門が閉まるまであと一分よ。」

その場の時が止まった。

勇 「やべえ！」

杏 「走るぞ！」

ま 「もうやだあつ！」

一斉に走り出した！

魔法少女組は力を抑えても間に合ったが、3人組はギリギリ間に合わなかった。

・・・

〔見滝原高校屋上〕

午前の授業が終わり、昼休みの時間がやってきた。

屋上は普段、鍵が掛かっている行けないのだが、まどかたち魔法少女は昼休みの時だけ魔法で鍵を開けお弁当を食べている。魔法少女事情もあるためだ。

ほむ「やつと静かになったわね。」

ま「休み時間になると5分でも静かにならないもんね、あの人たち。」

杏「ま、いいんじゃない？賑やかでさ。」

武「そうだぞ。楽しいのが一番だぞ。」

ほむ「私はまどかと静かに暮らしたいの。」

ま「学校じゃそうもいかないよ。」

巴「みんな、待たせたわね。」

武「ママさん！」

杏「先食ってるぞ。」

巴「あら、みんな楽しそうね。」

ほむ「杏子とマリアはあの不良たちの話題で盛り上がっているのよ。」

杏「ちよ、誤解させるような言い方すんな！」

巴「あら、佐倉さんが不良少年と仲良くするなんて、どういふことかしら。」



杏「その、あれだ。アイツら、意外と根性あるからな。」

武「あ、それは思ったぞ。」

巴「どうして？」

杏「アイツらと初めて喧嘩したあの日さ、アイツらはアタシを放課後の校舎裏に呼んで喧嘩しようとしてたんだ。3人で待ってた時はガツカリしたけどさ。」

「でも3対1をする気はないって言ってきたぞ。面倒だから近くにあった石を持ち上げて粉々にしたんだ。」

ほむ「普通の人間なら逃げ出すわね。」

杏「ところがさ、それでも逃げずに1対1でやるって言ってきたんだ。アタシは嬉しかったよ。」

「ま、ちゃんとぶつ潰したけどな。」

巴「もう、そこまで来たらいじめなくてもいいのに。」

武「あたしもそれは影から見てたぞ。他の奴とは違うと思ったぞ。」

巴「そうなのね。だから楽しそうなのね。」

杏「はあ!?別に楽しくねえし！」

ま「杏子ちゃん可愛い。」

杏「まどかまで！」

と談笑していると、屋上の柵の下から連中が登ってきたではないか。

勇「やっと見つけたつすよ！」

吉「総長も不良つすね。」

カ「どうやって入ったんすか？」

杏「げっ！勇哉たち！」

ま「登ってきたの？」

武「だはは！おもしろええ！」

ほむ「ここもダメなのね。」

巴「貴方たちが件の。」

勇「？総長の先輩つすか？」

巴「そうよ。」

勇「俺、勇哉つす！そしてこの2人が吉史とカツヒロつす！」

吉&カ「オツス！」

巴「あ、ええ、どうも。」

たじたじである。

杏「ていうかなんでここがわかったのさ！」

勇「今日は屋上に侵入しようかと外から見上げたら、総長が見えたからっすね。」

吉「よじ登るのなんて簡単っすよ。」

カ「先公に見つかつたけどな。」

ま「フエっ。」

ほむ「それはまずいわね。」

先生「そこにいるのはわかつている！ここの鍵を開けなさい！」

悪い予感の中した。

杏「やべっ！逃げるぞ！」

武「ほむら、頼む！」

ほむ「仕方ないわね。」

ヒュンツ！！

3人組が扉に釘付けになっている隙に、魔法少女組はほむらの力で脱出した。

吉「あれ？総長がいねえ！」

カ「いつの間に！」

扉が開いた。

先生「またお前らか！きっちり反省してもらうからな！」

勇「めんどくせえ。」

3人組はその日、放課後に居残りさせられた。

•  
•  
•

「教室」

ま「それじゃあ帰ろつか。」  
ほむ「ええ。」

一日の授業が終わり、下校時間となった。

まどかとほむらは弓道部に所属しているが、今日は休みである。というより、運動部のほとんどが同じ曜日に休みとなっている。

杏「ふぁー、やっと帰れる。」

武「姐さんはほぼ寝てたぞ。」

杏「アタシはこういう退屈なのが苦手なんだよ。」

「しかも今日はダンス部も休みだしね。」

武「空手部もそうだぞ。」

杏子はダンス部に、マリアは空手部に所属している。

勇「総長、俺が解放されるまで残ってくれねえか？」

杏「なんでさ。」

勇「だってよお、」

「総長が居ねえと見滝原を制圧出来ねえんだよ！わかるだろ！」

杏「わけわかんないこと言ってるじゃねえよ！」

武「だはは！」

ま「ンフツ」

ほむ「笑ってはいけなかったのに。」

この光景を赤の他人が見ても面白くないだろう。しかし、親しい仲だからこそ笑えるのである。

杏「取り敢えずアタシは帰るよ。」

勇「えー。」

武「じゃあな！」

ま「またあした。」

勇「しょうがねえ。」

勇哉が教室を出ようとする、廊下で吉史とカツヒロが待っていた。

吉「行くぞ勇哉。」

カ「帰りてえ。」

3人組は、生徒指導室へ向かった。

•  
•  
•

〔通学路〕

時刻は17時。まだ外は明るい。

4人が並んで歩いていると、あの人物が現れた。

さ「おっ待たせー！」

杏「待ってねえよ！」

さ「いやー、というわけで今回も始まりましたねー、あたしたちのショートコント。」

杏「勝手に漫才始めんな！」

武「だはは！」

ま「ウエツヘヘヘ」

ほむ「フフ」

ま「ほむらちゃんが笑った！」

ほむ「笑ってないわ。」

さ「素直じゃないのは良くないぞー。」

さやかはニヤニヤしながら言った。

ほむ「貴女にだけは言われたくないわ。」

さ「だけを強調するなー！」

武「腹痛い！腹痛いぞー！」

こんな笑顔で溢れた日常が、いつまでも続けばいいな。誰もがそう思った筈である。しかし、現実はその甘くはないのである。



ゴオオツ！

5人「!!」

一同はすぐに気づいた。それは紛れもなく、怪魔の魔力反応だからである。  
場所は、さほど遠くはない。

第17話へ、続く!!